

ゼノブレイド2ソード
ド・オブ・メモリーズ
～目覚めよ、幻想の
聖剣～

ヒビキ7991

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グランドセレスタギヤラクシーに勝利し、宇宙をブラックホールの危機から救ったアース・イレブン。戦いを終えた彼らは、自分達の宇宙船ギヤラクシーノーツ号で故郷である地球に向かっていった。だがワープ直前、本来の人格に戻った水川みのりの暴走により自動航行装置が故障し、ギヤラクシーノーツ号は制御不能のままワープに突入してしまう。

そして気が付くとそこは、《巨神獣（アルス）》と呼ばれる巨大生物と人類、そして様々な種族が共存する雲海に覆われし世界《アルスト》だった。仲間達とはぐれ一人アルス

トに迷い込んだ天馬は、サルベージャーを生業とする少年《レックス》と、彼と生活を共にする老いた巨神獣《セイリユウ》、天の聖杯の異名を持つブレイドの少女《ホムラ》、天馬の前に突如現れた謎の少年ブレイド《クリス》と出会い、新たな仲間達と共に楽園を目指す冒険へと旅立つのであった。

※無印及び3との繋がりは無視で進めさせて頂きます

目次

第十話	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
339	300	241	205	169	146	91	59	25	1

第一話

「ギャラクシーノーツ号 コックピット」

「ここは宇宙空間を走る宇宙船、ギャラクシーノーツ号のコックピット。」

天馬

「もうすぐ最後のワープだね。」

葵

「ワープしたらそこは懐かしの地球。やっと帰れるね。」

宇宙の運命を掛けた惑星間サッカー大会グランドセレスタギャラクシーが終わり、松風天馬率いる地球代表アースイレブンは、自分達の故郷である地球に戻るため最後のワープに備えていた。

信助

「思えば宇宙でサッカーするなんて、最初はコレッポッチも思ってたよな？」

劍城

「予選決勝直後にスターシップスタジアムが現れ、ストームウルフや予選で戦った連中の正体は実は宇宙人だった。あの時の衝撃は今でも鮮明に覚えてる。」

真名部

「でもって他の星で異星人と本格的にサッカーをすることになって、劍城君がいつの間にか偽物に入れ替わった挙げ句、黒岩監督と一緒にファミラム・オービアスの側に居ましたしね。その件につきましては、僕達も驚きました。」

野咲

「でもさ、何だカンだ言っておバちゃんの事が一番のビツクリポイントじゃない？」

神童

「確かに。ギャラクシーノーツ号の車掌までは良かったが、ブラックルームを作ったのがオバちゃんだったとはな。」

コックピットには天馬達以外にも、座名九郎・井吹・皆帆・好葉がコックピットに居た。

プシュー

と、そこへ噂をすれば何とやら。オバちゃんことしずねがコックピットに現れた。

しずね

「おーい、みんな！そろそろワープするから、席に着いておくれよ！」

ヨネの指示でアースイレブン一同は席に着く。すると……

「何じゃこりやあああ!？」

今度は叫び声と共に水川が、後に続いて九坂と鉄角がコックピットにやって来た。

水川

「何なんだよ此処!?! てか、お前ら誰だよ!?! 何なんだよ!?!」

九坂

「おいコラ！大人しくしろ！」

鉄角

「暴れんなってコノ！」

暴れる水川を拘束する九坂と鉄角。水川はポトムリの精神が抜けた事で、「岩城中のミノタウロス」と呼ばれる本来の人格に戻っていたのだ。

好葉

「こ、怖い……………」

皆帆

「これって……………」

真名部

「岩城中のミノタウロスの復活です……………」

皆帆・真名部・好葉は背もたれを盾にして身を潜め、剣城達は静かに様子を伺う。そして天馬と葵はしずねと共に水川を落ち着かせる事にした。

葵

「水川さん、落ち着いて！」

しずね

「後でちゃんとキツチリ説明するから、今は席についてくれないかい？」

天馬

「そうそう！これからワープに入るから………！」

水川

「わくぷうく？何寝ぼけた事言ってるんだ！お前何処中だコラ！」

水川は天馬にズケズケと近寄る。

天馬

「いや、だから先ずは落ち着いて………」

水川

「落ち着いて居られるかよバカ!!」

ドカッ！

天馬

「どわっ!？」

ゴンツ!

水川は天馬を蹴り倒し、天馬は倒れた拍子に操縦席に身体を強打した。

葵

「天馬!？」

天馬

「イテテ……大丈夫、ありがとう葵。」

天馬は葵の手を借りゆっくり立ち上がる。

バチバチ!ビリビリ!

ガコンツ!

すると、操縦席の制御装置が火花を吹き、ギャラクシーノーツ号が大きく揺れ始めた。

野咲

「きゃっ！なにになにに!?!」

水川

「おいおい、今度は何だよ!?!」

しずねは慌ててシステムをチェックする。

しずね

「大変だ！さっき天馬君が制御装置にぶつかった時に自動航行装置が故障したみたい
!」

しずねの放った言葉に一同は驚愕した。

天馬

「オバちゃん、何とかならない!？」

しずね

「ちよつと待って、手動操縦に切り替えてみるよ!」

しずねは自動操縦から手動操縦への切り替えを試みるが、故障のためか操作を全く受け付けない。

しずね

「ダメだ、完全に制御不能だよ!こうなったらこのままワープするしかない!みんなしっかり掴まりな!!」

しずねの指示でアースイレブンは身を屈め、座席や手摺に掴まり拘束。

キイイイイインツ!

そしてギャラクシーノーツ号は制御不能のままワープに突入し、宇宙の彼方へ姿を消した。

天馬

「……………
う……………
うく
ん？
」

気が付くと、天馬は俯せに倒れていた。

天馬

「……………どうなったんだ？」

天馬は顔を上げ、ふらつきながらゆっくりと立ち上がる。

天馬

「っ!？」

立ち上がって直ぐ、天馬は辺りを見て嘔然とした。そこは以前訪れた200年後の未来世界やファラム・オーピラスとも引けを取らない程の未来都市……………だったらしいが、それは恐らく遙か昔のこと。ビルや高架道路は倒壊し、辺りに瓦礫が散乱した廃墟だった。空は厚い雲に覆われ、至る所で竜巻がおきていた。

天馬

「何処だ此処……………みんな、大丈夫？」

天馬は辺りに仲間達が居ないか見回した。だが辺りには自分以外に誰も居らず、ギョラクシーノーツ号の姿も無かった。

天馬

「誰も居ない………どうなってるんだ？」

天馬は一先ず歩き出し、仲間達を探しに向かう。

天馬

「葵——！ 劍城——！ 信助——！ 神童さ——ん！ オバちゃん——！」

歩きながら仲間達の名前を叫ぶが、自分の声がこだまするだけだった。すると、遙か前方に何かキラキラ光るモノを見つけた。

天馬

「何だろう？！」

光の元へ向かうと、そこにあつたのは一冊の本だった。本はまるで魔法の本の様な洋書スタイルで、そこそこの厚みがあり、表紙の中央には青く輝くひし形のクリスタルが埋め込まれていた。

天馬

「本？何でこんなところに？」

天馬は本を手に取り、表紙を開く。本には見たこと無い文字が書かれていた。

天馬

「見たこと無い文字だ。でも何だろう……何となくだけど、読める気がする。」

天馬は徐に本に記された文字を読み始めた。

天馬

「これはかつて、世界を守るために戦った十人の剣士達の記録。彼らの意思を未来に伝

えるため、私は此処に記録を残す。」

天馬はページを捲り、本を読み始める。本の中には文字の他に、剣士達の水墨画が何枚か描かれていた。

天馬

「炎の剣士セイバー、水の剣士ブレイズ、雷の剣士エスパード、土の剣士バスター、風の剣士剣斬、音の剣士スラツシユ、煙の剣士サーベラ、刻の剣士デュランダル、光の剣士最光、闇の剣士カリバー、不死身の剣士ファルシオン、そして彼らが立ち向かった全知全能の神ソロモンと物語の魔物ストリウス……」

キイイイイインツ!

天馬

「っ!?!」

シュンツ!

突然、開いていたページが発光し、次の瞬間天馬が光となってその場から消えた。

ドコツ シユウウ……………

本はその場に落ち、表紙に埋め込まれていたクリスタルも光の粒子となって消えた。

天馬

「……………あれ？」

気が付くと、天馬はまた別の場所に居た。今度は四方を高い本棚で囲まれた不思議な部屋だ。

天馬

「今度は何処だ……………図書館？」

「此処は君が手に入れた本、《ソード・オブ・メモリーズ》の中だ。」

突如、天馬の背後から男の声が出た。振り向くとそこには、紫・金・黒の三色で構成されたスーツと黒金の腰マント。両肩と胸に鉄の鎧を装備した、天馬ソックリの銀髪と赤い瞳の少年の姿があった。

天馬

「君は……………SARU? いや違う……………君は誰?」

???

「俺は《クリス》。この本に宿りし《ブレイド》だ。」

天馬

「ブレイド?」

クリスはそう言うと、突如天馬の額に自身の手を当てる。

天馬

「っ!!」

手を当てた途端、天馬の脳裏にビジョンが写し出された。雲に覆われし世界……………その世界の中心に聳え立つ巨大な木……………そして一人の少年と少女の姿。

天馬

「今のは……………」

クリス

「天馬、君はこれからある少年と少女に会い、共に旅をしてほしい。」

天馬

「旅を？何で？」

クリス

「まもなくこの世界に、終わりが近づいている。」

天馬

「っ!？」

クリスの言葉に、天馬は驚いた。

クリス

「俺の中に眠る剣士達の全てを君に預ける。そして君が少年と少女に出会いし時、俺は君の前に再び現れよう。君のブレイドとして。」

天馬

「ねえ、その少年と少女って誰なの？そもそも、君って何者？あとブレイドって？」

クリス

「時が来れば、何れ分かる。」

キイイイイインツ!

天馬

「っ!?!」

突然、部屋全体が強く光りだし、辺りは強い光に包まれた。

天馬

「……………うゝん」

そして気が付くと、又しても別の場所に居た。鉄板と鉄骨で組まれた小屋らしき建物の中、彼は固いベッドの上で仰向けになっていた。

天馬

「まただ……………」

天馬は身体を起こし、ベッドを降り、小屋の外に出る。どうやら小屋が建っていたのは小島の様で、外には洗濯物を干している物干しや植木鉢、錆び付いたクレーンが設置されていた。

天馬

「……………」

だが島の周囲に広がっていたのは青い海ではなく、厚い雲の平原だった。

天馬

「何だこれ……………雲？」

「おっ、目が覚めたのかい？」

と、今度は小屋の上からクリスとは違う別の少年の声でした。小屋の上には不思議な青いスーツを着た、天馬と年が近そうな黒髪の少年が居た。

???

「よっー！」

少年は屋根から飛び下り、天馬の目の前に着地した。

???

「よかった、全然起きないから心配してたんだ……俺は《レックス》。君は？」

天馬

「俺？俺は松風天馬。えっと……レックスだっけ？此処はいたい……」

「ん？……目を覚ましたのか、レックス？」

と、今度は何処かから年寄りらしき男の声が聞こえてきた。

天馬

「……？誰かいるの？」

???

「此処じゃよ此処。」

と次の瞬間、小屋の裏から何か巨大な影が姿を見せた。そこに現れたのは、巨大な角の生えた竜の頭だった。

天馬

「ええええっ!?!ど、ドラゴン!?! って事は此処って、ドラゴンの背中!?!」

予期せぬ出来事に天馬はパニックになり慌て始める。

ツルツ

天馬

「えっ?！」

ザパーン!

と、天馬は足を滑らせ雲の中に落ちてしまった。

レックス

「天馬!?!」

???

「おい大丈夫か!？」

バシヤーン!

と、天馬は直ぐ雲の外に顔を出した。

天馬

「プハッ! って、何これ雲じゃなくて水!?! どうなってるんだよー!!」

T o B e C o n t i n u e d . . .

第二話

天馬

「フー、フー……アチツ！」

天馬は無事に雲の中から引き上げられ、小屋の中でレックスとスープを飲んでいた。

レックス

「落ち着いた？」

天馬

「うん、もう大丈夫。」

レックス

「そっか、じゃあ……」

ガラガラガラ……

レックスはスープを飲み干し小屋の窓を開く。窓の向こうには先ほどの竜が顔を覗かせていた。

???

「レックス、もうその少年は大丈夫なのか？」

レックス

「うん、もう大丈夫だって。」

???

「そうか、そいつは良かった。」

レックス

「じゃあ、改めて自己紹介からだね。俺はレックス。サルベージャーをやってるんだ。」

???

「ワシは《セイリユウ》。レックスの保護者代わりと言ったところかのお。よろしくのう。」

天馬

「俺は松風天馬。……ところで、俺なんで此処に居るの？」

レックス

「えーつと……………」

レックスの話によると、数時間前にセイリユウとサルベージを行うポイントを探していたところ、偶然雲の上を漂流する天馬を見つけ保護したそうだ。

天馬

「そっか、助けてくれてありがとう、レックス。」

レックス

「どういたしまして。ところで、天馬は何処の出身？良かったら送ってあげるよ。イン
ヴィディア？それともスペルビア？」

セイリユウ

「今の時期じゃと……………ここから一番近いのはグーラじゃな。」

何処かの地名だろうか、突然聞いたことの無い言葉を喋り出すレックスとセイリユウ。
ウ。

天馬

「ちよ、ちよつと待つて。レックス、さつきから何喋ってるの?」

レックス

「何つて、《巨神獣》^{アルス}の名前じゃんか。」

天馬

「あるす?」

又しても聞いたことの無い言葉が出てきた事に、天馬は混乱し始めた。

セイリユウ

「お前さん、巨神獣を知らぬのか?」

天馬

「は、ハイ……………」

レックス

「もしかして記憶喪失?……………いや違うな、ホントに知らないツポイ。」

セイリユウ

「ううむ……………よく見たらお前さんの服、見たこと無い創りじやの。」

と、セイリユウは天馬の服を見て言った。ちなみに天馬は現在、イナズマジャパンのジャージを着ている。

セイリユウ

「……………お前さん、いったい何処から来た？正直に話してみなさい。」

セイリユウがそう言うと、天馬は少し考える。そして数秒後、レックスとセイリユウに話した。自分がレックスに会う前の事を。

レックス・セイリユウ

「宇宙から来た!?!」

案の定、レックスとセイリユウは仰天した。

天馬

「多分ね。俺、レックスに会う前は仲間達と一緒に宇宙船に乗って、故郷の星に帰るところだったんだ。でも途中で船が故障して、気が付いたら変な廃墟に居て……………」

レックス

「廃墟？」

天馬

「うん……………真つ暗で、崩れた建物や瓦礫だらけの街だった。俺はその街で不思議な本を見つけて、気付いたらレックスの家で……………」

レックス

「そっか……………」

天馬

「……………みんな、今何処に居るんだろう……………無事だと良いけど……………」

天馬は自分の事で不安だったが、それ以上に仲間達の事が心配だった。

レックス

「……………あのさ、良かったらしばらく俺達と一緒に暮らさない？」

天馬・セイリユウ

「えっ？」

突然のレックスの提案に、天馬とセイリユウは驚いた。

レックス

「ひよつとしたら、天馬の仲間達もこの世界に来てるかも知れないだろ？一緒に探してあげるよ。」

天馬

「良いの？」

レックス

「もちろん！じつちゃんも構わないだろ？」

セイリユウ

「別に構わぬが、信用してよいのかレックス？」

レックス

「困ってる人を放っておけないだろ？それに俺には分かる。天馬は嘘を言う人じゃないって。」

天馬

「レックス………ありがとう！」

レックス

「じゃあ天馬、俺がこの世界の事教えてあげるよ。」

レックスは語りだした。

レックス

「この白い雲、《雲海》に覆われた俺達の世界の名前は《アルスト》。俺達はこのアルストで、じっちゃん達みたいなの《巨神獣》の上で生活してるんだ。」

天馬

「なんで巨神獣の上に？」

レックス

「アレを見て。」

レックスの指差す方向には、天まで通じる程の高さがある巨大な木があった。

天馬

「アレは、木？」

レックス

「俺達はあの木を《世界樹》って呼んでいて、雲海はあの世界樹を中心に広がっているんだ。伝承じゃ、この世界ができる遙かな昔、人は世界樹の上に住む創生の「神」と共に暮らしていた。天空に築かれた豊穡の大地……昼を夜に、雨を晴れにすることもできる理想郷……人はそこを《楽園》と呼んでいた。」

天馬

「楽園、理想郷かあ……何だか凄いな！」

レックス

「だろ？でもある日、人は楽園を追われたんだ。」

天馬

「追われた？何で？」

レックス

「分からない。神の怒りに触れたからなのか、それとも別の何かなのか……楽園を追われた人はアルストに移り住んだけど、長く生きることが出来なかった。やがて人が滅亡に瀕したとき、憐れに思った神は自らの僕である巨神獣を遣わし、人を救った。僅かに生き残った人は巨神獣へと移り住み、幾万もの昼と夜を共に過ごした。」

「これが俺達の世界のたまかな歴史だ。どう？」

天馬

「どうって言われても……俺の居た世界と全然違うとしか……」

レックス

「天馬の生まれた世界ってどんな世界なの？」

天馬

「俺の世界？ そうだなあ……青い海があつて、立派な街が沢山あつて、山や森が沢山あつて、人や動物が沢山住んでるって感じかな？」

レックス

「何か、俺にはそつちの方が想像出来ないな……でも、凄く平和そうな世界って感じはするよ。」

天馬

「ありがとう、レックス。」

天馬とレックスは微笑んだ。

天馬

「ところでレックス、サルベージャーって何？」

レックス

「簡単に言うなら、雲海に沈んでるお宝を引き上げて換金する仕事だよ。じつちゃんの背中に乗って、色んなポイントを巡ってはお宝を引き上げてるんだ。」

天馬

「……………ねえレックス、俺もレックスの仕事手伝っても良いかな？」

レックス

「えっ？別に構わないけど……………」

天馬

「しばらくお世話になるんだから、それくらいさせてよ。それに、俺この世界の事もっと知りたいんだ！」

レックス

「そうか……………よし、分かった！」

こうして、天馬はレックスと共にサルベージャーとして共同生活を送ることとなった。レックスから予備のサルベージャースーツを借り、彼からサルベージャーについて、アルスト中に潜むモンスターについて、セイリユウからモンスターとの戦いに必要な武器《アーツ》について教わり、共に雲海からお宝を引き上げ、共に寝食を過ごした。

そして共同生活を始めてから数日が経ったある日……

ジリジリジリ……

この日は昼食に、サルベージで引き上げたコンテナに潜んでいたモンスター《カリブ・シユリブ》の爪を七輪で焼いていた。天馬が七輪を見張り、レックスはサルベージで手に入れたお宝を整理している。

天馬

「レックス、焼けたよー！」

レックス

「おっ、待ってました！」

カリブ・シユリブの爪は火が通って赤くなり、身からエキスが染みだし、グツグツという音と共に良い香りを漂わせていた。

セイリユウ

「ああー七輪の熱が心地良いわい！肩凝りに効くのお……………」

セイリユウは背中で七輪を焚かれて喜んでいる様子。

レックス

「そろそろ動かそうか？」

セイリユウ

「いや、もうしばらくそこで良い……………ああ」

レックス

「オツケー！」

天馬

「お灸か何かかな？」

レックスと天馬は七輪の前に箱を置き、箱の上に腰を下ろし、カリブ・シュリブの爪を手に取る。

レックス

「ウヒョー、美味そう！」

天馬

「いただきまーす！」

そして美味しそうにカリブ・シユリブの爪にかぶりつく。

天馬

「美味しい！」

レックス

「一仕事終えた後に食べると、また格別なんだコレが。」

すると……………

「■■■■ーーー!!」

天馬・レックス

「ん？」

突然、雲海から何かの鳴き声が聞こえてきた。天馬達は鳴き声が聞こえた方角を見ると、雲海から巨大な巨神獣が姿を見せた。

天馬

「アレは、巨神獣？」

天馬達が目撃した巨神獣は、胸の辺りに青く輝くコアと全身に青く輝く模様を持っていた。だが次の瞬間、コアと模様の光が消え、巨神獣は力尽きた様に雲海に沈んでいた。

天馬

「レックス、巨神獣が！」

レックス

「まただ………」

天馬

「また？」

レックス

「巨神獣は俺達が生きていく上で欠かせない存在だけど、俺達人間と同じく寿命がある。寿命が尽きた巨神獣は、ああやって雲海に沈んでいっっちゃうんだ。」

セイリユウ

「しかもここ最近、雲海に沈む巨神獣は増え続けておる。恐らく全体的に巨神獣達の寿命が、終わりに近づいてるのかも知れん。」

天馬

「じゃあ……まさかセイリユウさんも？」

セイリユウ

「うむ、いずれあなるじやろう……それがワシら巨神獣の運命じゃからな、抗ったところで詮方無い……」

レックス

「イヤサキ村も、いつかあなるのかな？」

セイリユウ

「今日明日って事は無かろうが、いずれな……」

レックス達はふと、世界樹に目を向けた。

レックス

「……………じつちゃん達巨神獣ってさ、あの上で生まれたんだろ？」

セイリユウ

「伝承ではそうなつとるが、ワシが生まれたのはこのアルストの世界じゃ。ご先祖が何処で生まれたのかまでは知らん。」

レックス

「あるのかなあ、楽園……………」

天馬

「アルストを創った神様が住む場所……………世界樹の上に広がる豊穡の大地か……………」

セイリユウ

「本当にそんな所があるのなら、皆安泰じゃのう……………争いもせずに済む。」

レックス

「あるといいなあ、そしたら村のみんなも……………」

それから二人は昼食を済ませ、サルベージで手に入れたお宝を整理していた。

レックス

「よし、今日の成果も十分だ。」

天馬

「今日の仕事はコレで終わり？」

レックス

「いやまだだよ。これだけあれば、換金しても大丈夫そうだ。じっちゃん、ひと泳ぎ《ア
ヴァリティア商会》に向かってよ！」

セイリユウ

「今から換金か？ワシはもう寝る時間なんじゃがのう……………」

レックス

「ワザとらしく老け込むなよ！まだ日は高いつて！」

セイリユウ

「全く、巨神獣使いの荒い奴じゃ……………」

セイリユウはそう言うと、ゆっくりと動き始めた。

天馬

「レックス、アヴァリティア商會って何？」

レックス

「俺がいつも換金してる場所さ。行けば分かるよ。」

「アヴァリティア商會　ゴルトムント帰還の港」

出発して数時間後、レックス達は中型の巨神獣《ゴルトムント》に吊り下げられた大型商業施設《アヴァリティア商會》に到着した。

レックス

「着いたよ、此処がアヴァリティア商會だ。」

天馬

「うわあ、でつかいなあ！」

レックス

「此処はアチコチの国から色んなモノが集まる場所なんだ。俺がサルベージで手に入れ

たお宝は、みんな此処で取引してもらってるんだよ。」

レックスはセイリユウを棧橋に停泊させ、天馬とレックスはセイリユウの背中から下りた。すると早速……………

天馬

「ねえレックス、アレは何?」

天馬がある方向を指差した。指差す方向には、座席や操縦桿を装備した小型の巨神獣が居た。

レックス

「あれは《巨神獣船》。じつちゃん達みたいな小型の巨神獣を改造して作った、雲海を航るための船さ。」

セイリユウ

「このアルストの世界では、巨神獣船は雲海の上を移動するのに欠かせない乗り物なんじゃ。中には砲台やら装甲やらを沢山付けた、巨神獣戦闘艦などもある。」

天馬

「へえー。」

「ようレックス！」

するとそこへ、一人の若い男がやって来た。

レックス

「《ハイラム》さん！」

天馬

「知り合い？」

レックス

「うん、港で船の整理をしてるハイラムさんだよ。」

ハイラムは笑顔でレックスに近づく。

ハイラム

「どうだ、最近の景気は？」

レックス

「悪かったら此処に来やしないよ！」

ハイラム

「だろうねえ！……おや？そっちの彼は誰だい？」

ハイラムは天馬に目を向ける。

レックス

「彼は天馬。俺の新しいサルベージャー仲間さ。」

天馬

「はじめまして、天馬と言います！」

ハイラム

「天馬か、よろしくな！で、荷揚げするもんは何れだ？」

レックス

「荷揚げは商談が成立してからで良いからさ、しばらく居させてよ。」

ハイラム

「半日で15ゴールドだぞ？」

レックス

「それは物が売れてからの話だね！じゃあヨロシクー！」

レックスはそう言うと、一目散に棧橋を離れた。

天馬

「レックス！ちよつと待ってよ！」

天馬も慌ててレックスを追いかける。

ハイラム

「ああ、おい！前金だったのに、また俺がドヤされるじゃないか………」

残されたハイラムはふと、セイリユウに目を向ける。

セイリユウ

「ワシは財布は持つとらん。」

ハイラム

「だろぅねえ……………」

一方、棧橋を離れた天馬とレックスは、別の棧橋に見慣れない黒い船を見つけた。

天馬

「レックス、アレも巨神獣船？」

レックス

「いや、アレは巨神獣船じゃない。巨神獣船じゃないのに、あんな大きい船が雲海に浮いてるなんて、いったいどういう仕組みなんだろう……………」

—————

くアヴァリティア・バザールく

天馬とレックスは《アヴァリティア・バザール》へとやって来た。バザールでは幾つ

もの露天が軒を連ねていたが、大半の露天は人ではなく、大きな耳と滑らかな毛並みを持った小柄の丸い生き物達が店番をしていた。

天馬

「ねえレックス、あの丸い生き物は何？」

レックス

「アレは《ノポン族》。この世界で人と一緒に暮らしてる種族の一つさ。アチコチの国や地域に住んでるけど、特にこのアヴァリティア商会には沢山のノポン達が住んでるんだ。金にうるさくて商売に勤しむノポンが多いから、ノポンと言えば商人ってイメージを持たれることも多いんだ。」

天馬

「へえー。」

そうお喋りをしながら、二人はバザールの一角にある《中央交易所》を訪れた。交易所の受付は雌のノポン族《メロロ》。

レックス

「メロロさん、こんにちは！」

天馬

「こんにちは！」

メロロ

「おおレックス！いらっしやいも………おや、其方の坊っちゃん是谁も？」

メロロは早速天馬に気が付いた。

レックス

「彼は天馬。最近俺と一緒に同居し始めたサルベージャー仲間だよ。」

メロロ

「そうかもそうかも！ウチはメロロ。このアヴァリティア中央交易所を切り盛りしてるも！よろしくも。」

天馬

「よろしくお願ひします、メロロさん。」

メロロ

「それで、今日は何を持ってきてくれたも？」

レックス

「ちよつと待つてて！今持つてくる！」

レックスと天馬は一旦セイリユウの所へ戻り、サルベージで手に入れたお宝を交易所に運んだ。その後、メロロがお宝を鑑定し見積書を出したが……

レックス

「ええーっ!?!こんだけえ!?!」

見積書に記載された報酬額を見てレックスは啞然とした。

メロロ

「無理言わないでも………これでも上乘せしてあげてるも………軍事物資なら割り増ししてあげるんだけども?」

メロロの見つめる先には何処かの国の兵隊だろうか、黒ずくめの軍服を着た者達と、甲殻類を思わせる鎧を着た者達の姿があつた。

メロロ

「休戦してたスperlビアとインヴェディアは今じゃ開戦準備の真っ最中だから、いくらあつても足りないも。どうだも？」

レックス

「前にも言っただろ？そういうのはパス。」

メロロ

「んもう……アンタくらいの腕なら、ズンとこ儲かるのにもう……」

レックス

「まあ、今日はそれでいいや。200……いや、500は今で残りはいつもので。」

メロロ

「分かったも！」

レックスはメロロから報酬金を受け取り、レックスと天馬は交易所を離れた。

天馬

「ねえレックス、さっきメロロさんが言ったのって……？」

レックス

「開戦の事？この世界には大きく分けて三つの国家があるんだけど、その内スペルビア帝国とインヴィディア烈王国の二つが、近々戦争をしようとしてるんだ。」

天馬

「もしかして、さっき見た巨神獣の死と関係が？」

レックス

「ああ………巨神獣の寿命が尽き、国が滅ぶのを避けたいんだと思う。だから相手の領土を奪うため、戦争をしようとしてるんだ。だからさ、楽園があれば………あれ？」

気が付けば天馬はある露店で品物を見ていた。

店主

「毎度ありも！」

天馬は露店で何かを買った様だ。

天馬

「ねえレックス、これ見て！」

天馬が買ったのは、古いサッカーボールだった。

レックス

「なに？その白黒のボール？」

だがレックスは何に使う物なのか分からない様だ。

—————

くゴルトムント飛行甲板く

2人はゴルトムント飛行甲板に場所を移し、天馬はレックスにサッカーについて教えた。

天馬

「これはサッカーボール。サッカーをするためのボールだよ。」

レックス

「サッカー？」

天馬

「サッカーは、俺の世界にあるスポーツの一種で、俺の大好きなスポーツなんだ。1チーム11人のプレーヤーが、手を使わずにコイツを相手のゴールに運んで、点を競うんだ。」

レックス

「手を使っちゃ駄目なのか？」

天馬

「うん。でも1人だけ、ゴールを守るゴールキーパーは手を使う事が出来る。他のプレーヤーは、足・胴・背中・頭を使ってボールを運ぶんだ。」

レックス

「何だか難しそうだね。」

天馬

「確かに最初は誰でも難しいよ。でも……………」

天馬はボールを落とし、リフティングを始めた。レックスは天馬のリフティングを見て興味津々の様子。

レックス

「凄え！ボールがまるで天馬の一部みたいだ！」

天馬

「こんな感じで、慣れれば案外簡単にコントロール出来るよ。」

と、天馬はボールを手に取りレックスに渡す。

天馬

「レックスもやってみる？」

レックス

「いいの？やるやる！」

レックスはボールを受け取り、リフティングを始めた。

レックス

「よっ！ほっ！ほっ！ほいっ！」

天馬

「上手いよレックス！その調子！」

思いの外呑み込みが早いレックスと、それに感心を見せる天馬。すると……………

???

「レックス！」

甲板に一人のノボンが現れ、レックスと天馬は呼び声に気付き顔を向けた。

レックス

「《プニン》さん！久し振り！」

プニン

「相変わらずイキが良い……………じゃなかった。威勢が良いも。」

天馬

「レックスの知り合い？」

レックス

「商会で働いてるノポンの一人、プニンさんだよ。時々俺に仕事を回してくれるんだ。それでプニンさん、今日は何の用？」

プニン

「うむ……レックス、お前確かリベラリタス島諸郡のイヤサキ村出身だったも？」

レックス

「えっ？そうだけど？」

プニン

「直ぐに商会长室に行くも！《バーン》会长がお前を御呼びだも！」

レックス

「会长が、俺を？」

To Be Continued…

第三話

（商會長室）

天馬とレックスは商會長室にやって来た。商會長室にはプニンよりも大きく、全身に指輪等の貴金属を着けた緑色のノボンが居座っていた。

バーン

「よく来てくれたも。アヴァリティア商會会長のバーンだも。」

レックス

「は、はじめまして……………」

天馬

「この人が、バーン会長……………」

バーンの迫力に圧倒されるレックスと天馬。部屋には三人の他に、バーンの秘書らしき人間の女性が二人居た。

バーン

「もも？俺が呼んだのはレックスだけの筈も。お前は誰も？」

バーンは天馬に目を向ける。

天馬

「は、初めましてバーン会長！俺、新人サルベージャーの天馬と申します！」

バーン

「……………なるほど、新人も？その感じだと、レックスのパートナーってところかも？」

レックス

「はい！最近一緒に暮らし始めた仲でして……………」

バーン

「まあ良いも……………プニンから随分と腕の立つサルベージャーだと聞いてるも。レックス、その腕を見込んで頼みがあるも。」

レックス

「会長自ら、俺に仕事の以来を！」

会長直々の以来に驚くレックス。

バーン

「報酬は10万ゴールドも。」

レックス

「じゅ、じゅうまん!?!」

更に報酬額の高さに驚くレックス。

バーン

「聞いて驚いたも?ちなみにそれは手付け金。成功報酬は更に10万プラスも!」

レックス

「合わせて20万、マジですか……………」

更に成功時のボーナスに唾然とするレックス。

バーン

「詳しい話は直接聞くと良いも。おい、入れるも。」

バーンは秘書の一人に指示を出し、秘書は隣の部屋へ向かう。すると数分後、隣の部屋から数人の人影が現れ商会長室に現れた。猫の様な獣耳をした銀髪の少女、屈強な体格をした黒い鎧と黒髪の男、鬼を彷彿とさせる仮面を被った銀の鎧と銀髪の男、そして少女の側には青いクリスタルを埋め込んだ鎧を纏った白い虎、黒髪の男の側には全身に青く輝く筋が入った黒い怪物が居た。

レックス

「《ドライバー》！それに《ブレイド》！スツゲエ、始めて見る！」

天馬

（ブレイド？何処かで聞いた様な……………）

すると、仮面の男が静かにレックスに近づいた。

仮面の男

「依頼内容は、ある物資の引き上げだ。最近の海流変動によって発見された、未探査海域のかなり深いところに沈んでいる。」

バーン

「ベテランのチームを紹介するって言ったけど、リベラルタスの出身で少数精鋭の人材をという希望だったも。それで白羽の矢が立ったのが、お前なんだも。」

レックス

「へえ、ソイツは腕が鳴るねえ！」

依頼の内容と抜擢された理由を聞いて、レックスはテンションが上がっていた。

少女

「フフ………ククク！」

すると突然、獣耳の少女が笑い出した。

獣耳の少女

「子供のサルベージャー？ 《シン》、今回の仕事って子供の遠足も兼ねてるんだっけ？」

少女は仮面の男を《シン》と呼び、少女はレックスを見ながら言った。

レックス

「何だよ？見た目が子供っぽいのは、アンタも同じだろ？」

少女に子供扱いされてイラッと来たレックス。

獣耳の少女

「アタシはこの程度の額で、そんな馬鹿みたいに喜んだりしないよ。」

レックス

「馬鹿みたいって何だよ!？」

天馬

「レックス、落ち着いて！」

怒りがヒートアップしたレックスと、抑える天馬。すると、少女の隣に居た虎のブレイドが近付いて来た。

虎のブレイド

「レックス様でしたな？」

レックス

「は、はい……………」

天馬

「と、虎が喋った……………!?!」

虎のブレイド

「虎ではありません。私は《ニア》お嬢様に仕えしブレイド、名を《ビヤッコ》と申しま
す。此度はお嬢様が大変失礼なことを……………何卒、ご容赦を……………」

レックス・天馬

「はあ……………」

ビヤッコは獣耳の少女を《ニア》と呼び、ビヤッコはレックスに頭を下げ謝罪した。

ニア

「ビヤッコ！アンタまた余計な……………」

黒髪の男

「よせよニア。まあでも、気持ちは分からんでもない。それに……………」

怪物のブレイド

「へっへっへ……………」

黒髪の男は右手に青いクリスタルの刃の剣を装備し、男はレックスに、その隣に立つ怪物のブレイドは天馬に目を向ける。

黒髪の男

「確かめるのも容易い！」

天馬・レックス

「っ!？」

黒髪の男はレックスに向けて剣を振るい、怪物のブレイドは天馬に襲い掛かる。

ガキーン！

黒髪の男

「ほうっ？」

レックスは男の剣を避け、腰に装備していた剣を手に持ち反撃。男は剣を逆手に構え、レックスの剣を受け止めた。

シュツ！ バシューン！

天馬は怪物のブレイドの攻撃を素早く避け背後に回り、そこから怪物のブレイドに向けてサッカーボールをシュート。

バンツ！

怪物のブレイド

「ドワツ!!」

怪物のブレイドは体を反転させ天馬のシュートを受け止めようとしたが間に合わず、

シュートは怪物のブレイドの顔面に直撃。怪物のブレイドは反動で倒れた。

天馬・レックス

「いきなり何するんだ!？」

黒髪の男

「なるほど……………」

黒髪の男は剣を仕舞い、怪物のブレイドは顔を押しえながらゆっくりと立ち上がった。

ニア

「《メツ》！子供相手に何やってんだよ!？」

ニアは黒髪の男を《メツ》と呼んだ。

メツ

「この小僧じゃ不安だって言ったのはテメエだけ？で、結果は見ての通りだ。」

天馬

「……………」

天馬はボールを拾いレックスの隣に立ち、メツはレックスと天馬に目を向ける。

メツ

「やるじゃねえか。二人とも見た感じドライバーでは無さそうだが……………小僧、そのアーツ何処で覚えた？」

メツはレックスの剣を見て言った。レックスはメツを警戒しているのか、依然として剣を構えている。

レックス

「じつちゃんに教わったんだよ。小さい頃から、遊びと言えばコレばかりだった。」

レックスがそう言うと、メツは今度は天馬に目を向ける。

メツ

「そつちの小僧も、俺の《ザンテツ》にボールを蹴り込むとは大した腕……いや大した脚だ。」

ジャラ

メツはバーンに大金が入った錢袋を渡した。

メツ

「会長、追加金だ。あの茶髪の小僧も雇ってくれ。」

バーン

「もも？でも、レックスと違って彼は新人のサルベージャーも？」

メツ

「別に構わねえ、俺アイツらが気に入ったよ。腕は申し分ねえし度胸もある……期待してるぜ？」

メツはそう言うと、シンと共に商会長室を離れた。

ザンテツ

「……………」。

すると、先ほど天馬のシユートを受けたブレイド《ザンテツ》が天馬の前に立った。

天馬

「えっと……………さつきはゴメン、いきなりだったから……………」

天馬はザンテツが先ほどの事で怒っていると思っただが……………

ザンテツ

「いや、感動した！初見で誰かにやられるってのはお前が初めてだよ！」

どうやらザンテツも天馬が気に入ったらしい。

ザンテツ

「俺はザンテツ！よろしく頼むぜ！」

天馬

「よ、よろしく………」

ザンテツは右手を差し出し、天馬・レックスと握手をした。そしてメツとシンの後を追うように、ザンテツ・ニア・ピヤッコは商会长室を離れた。

—————

くゴルトムント帰還の港く

その後二人はバーンから手付金を受け取り、港に戻り仕事の事をセイリユウに報告した。

レックス

「と言うわけだからさ、天馬と一緒に戻ってくるよ。二・三日で帰ってくるから、心配しないで？」

レックスはそう言うが、セイリユウは心配を通り越して呆れていた。

セイリユウ

「と言うわけだからさ………じゃないわい！そんな訳の分からん仕事を引き受けおつて………依頼主の素性も分からんのじゃろ？」

レックス

「会長直々の仕事だよ？大丈夫だって。じつちゃんは、ここでゆっくりしててよ。じゃあ俺、準備があるから行ってくる！」

レックスはそう言うと、一目散に走り出した。

天馬

「ちよつとレックス!?!レックス!!」

セイリユウ

「まったく、何を考えちよるんじゃアイツは………天馬、すまんがしばらくレックスを頼むぞっ。」

天馬

「分かりました、セイリユウさん。」



「麺屋チャノポン」

その日の夜、準備を終えた天馬とレックスは、アヴァリティア・バザールの一角にある食事処《麺屋チャノポン》で、名物《アヴァリティア・チャノポン》を食べていた。

レックス

「仕事に行く前に、エネルギー付けとかなきゃな。」

天馬

「……………ねえレックス、会長室で見たビヤッコとザンテツつて、ブレイド……………なんだっけ？」

レックス

「ん？そうだけど？」

天馬

「その……………ブレイドって何？今まで見てきたモンスターや他の生き物とは、何か違う気がしたけど……………」

レックス

「うーん……………俺もそこまで詳しくないんだけどさ……………」

レックスは箸を置き、両手でひし形を作り天馬に見せる。

レックス

「ブレイドってのは、こういう形をした《コアクリスタル》っていう青い結晶から武器と一緒に生まれるんだ。で、人がブレイドに選ばれる事で《ドライバー》、つまりブレイドのパートナーになって一緒に戦う事が出来る。ってくらいかな、俺が分かるのは……………」

天馬

「そっか。」

ズズズ……………

天馬

「ふう、ごちそうさま！」

レックス

「さてと、んじゃ行くか！」

レックスと天馬は食事と勘定を済ませ、麵屋チャノポンを後にした。

—————

くゴルトムント門出の港く

レックスと天馬は帰還の港の反対側、門出の港にやって来た。棧橋には、かなり年期の入った赤い巨神獣船が停泊していた。

レックス

「ウズシオを出すのか！会長も豪気だなあ！」

天馬

「何、この船？」

レックス

「《雲海調査船ウズシオ》！滅多に御目に掛かれない、アヴァリティア商会最高の船さ！」

ウズシオを見てテンションマックスのレックスと、ウズシオをマジマジと見る天馬と、そこへビヤッコと呆れた様子のニアがやって来た。

ニア

「この程度の船で何感動してんのさ？本っ当に子供なんだから……………」

レックス

「子供とか大人とか関係無いだろ？この船の凄さが分かんないのかよ？」

ニア

「世間知らずはメンドクサイって言ってるの。」

レックス

「同じ年くらいのクセに偉そうに……………」

ニアの態度に少しムカツと来たレックス。すると、レックスがニアの足元に目を向けた。ニアの足の下にはウズシオから伸びたロープがあった。

レックス

「あ、そのロープだけど……」

ニア

「ん?」

レックス

「踏んづけてると出港の時に巻き込まれて、足が千切れるぞ?」

ニア

「エエツ!」

慌ててロープから離れるニア。

レックス

「まあ嘘だけど。どうやら世間知らずはお互い様みたいだな?」

ニア

「あ…………アンタねえ!!」

騙しが成功してニヤけるレックスと、騙されてカンカンに怒るニア。一部始終を見て笑いを堪える天馬とビヤッコであった。そして数十分後、準備を終えたウズシオは出港した。



ウズシオ 甲板 見張り台

出港から数時間後、レックスと天馬は見張り台で深夜の雲海を監視していた。

天馬

「ん……………?レックス。」

船の後方を監視していた天馬が何かを見つけた。レックスが双眼鏡で天馬の示す方向を見ると、帰還の港で見かけた黒い船が居た。

レックス

「港に居た黒い船………ついてきてるのか？」

「何だよ、けっこう寒いな………」

そこへニアが現れた。

天馬

「君は………ニア？」

レックス

「こんな時間に何だよ？また馬鹿にしに来たの？」

ニア

「違うよ。下で酒盛りが始まったから、ちよつくら逃げてきたのさ。」

そう言うと、ニアはレックスと天馬の間に立った。

天馬

「お酒ダメなの？」

ニア

「別に酒は嫌いじゃない。ただ、酔っぱらいは嫌いだ。」

レックス

「じゃあニアはサルベージャーにはなれないな。」

ニア

「何で？」

レックス

「《船には酔うな。酔うなら酒だ。》」

サルベージャーの合言葉みたいなモンさ。」

ニア

「下らない……………転職する気にもならないよ。」

レックス

「だろうね。ドライバーやってるなら、サルベージャーよりずっと稼げるんだろ？」

ニア

「……………レックスは、何でサルベージャーやってるの？」

レックス

「あれさ。」

レックスは世界樹を指差し答えた。

レックス

「サルベージャーをしてると、色んな物を拾うんだ。でも、何れもが一度は死んだもの達……最近、巨神獣の数もメッキリ減ったろ？」

天馬

「アヴァリティア商会に来る前にも見たよね、大きな巨神獣が沈んでいくところ……」
レックス

「俺達の住める場所は、どんどん減ってきてる。俺達も何れ、一度は死んだものになる……でも、彼処には楽園がある。」

ニア

「……………プクク、アハハハハ！」

レックスの話聞いて、ニアは笑いだした。

ニア

「アンタ、マジで楽園の伝説信じてるの？ 無いよ、そんなもの。アレは只のデツカイ樹さ。」

レックス

「彼処に行ける道具か何かが見つかるかも知れないだろ？ 良いじゃないか……：数少ない巨神獣や資源奪い合う必要も、大地が沈む不安に怯える必要も無い、皆が平和に暮らせる世界……：そんな世界を夢見ちゃいけないのかよ？」

ニア

「別に夢見るのは勝手だけど、そんなの努力するだけ無駄じゃない？」

天馬

「……：無駄な努力なんてない。精一杯の努力はきつと実を結ぶ。」

レックス・ニア

「えっ？」

天馬

「俺を鍛えてくれた師匠の言葉だ。この世に無駄な努力なんてない。レックスの努力だって、いつかきつと楽園に繋がると俺は思ってる。」

レックス

「天馬……………」

ニア

「努力は無駄になんてないか……………にしても、皆がねえ……………」

レックス・天馬

「ん？」

ニア

「人間ってのは、もつと自分勝手な生き物だと思ってたけど……………なあ、二人は親は居るの？」

天馬

「俺は居るよ。と言っても、父さんも母さんも長い仕事でずーつと家に帰ってこないけど……………」

レックス

「俺は居ない。小さい頃に死んだって、じつちゃん達から聞いた。」

ニア

「じつちゃんって、アーツを教えてくれたって言う？」

レックス

「ああ、俺をずっと育ててくれたんだ。人間じゃないけどね。」

ニア

「人間じゃない……何だかよく分かんないけど、そのじつちゃんつてのに感謝しなよ。」

レックス

「えっ?」

ニア

「アンタ、悪くないよ……アタシと一緒にだな……」



く仮眠室く

それから更に数時間後、ウズシオは調査ポイントに向けて嵐の中を進んでいた。

天馬・レックス

「Z……………Z……………Z……………」

天馬とレックスは仮眠室で横になり、身体を休めていた。

『現地到着！各作業員は持ち場に着け！サルベージャーは装備を整え、ハッチに集合！』

船内放送の声で二人は目を覚まし、二人は装備を整えハッチに向かう。ハッチには他にも数名のサルベージャーが集まっていた。

隊長

「目標の物資は深度450の沈没船の中だ。雲海中に没したままの船内を探索するのは困難なので、まずはフロートとクレーンで船体自体を引き上げる。その後、各班に別れて船内を搜索。目標の物資を発見次第、回収作業に移行する。ではまずはフロートの取り付け作業からだ！配置に着け！」

サルベージャー隊は一斉に後部デッキへ移動。その様子を、二階からニアとビヤッコが眺めていた。

ニア

「高いカネ払ってんだから、しつかりやれよー？」

ニアはそう言い、ビヤッコは静かに一礼。天馬は「ああ！」と言ってガッツポーズし、レックスは「偉そうに……」と小声で呟きながらサルベージャー隊に続き、嵐吹き荒れる雲海へと飛び込んだ。

—————

く雲海中 深度450地点く

しばらく潜ると、サルベージャー隊の前方に巨大な沈没船が現れた。

天馬

「アレが、目標の沈没船？」

現れた沈没船はウズシオよりも大きく、艦尾には大型の推進機が付いていた。

レックス

「かなりの年代物だ。でもあんな船は今まで見たこと無い。何処の国の船だ？」

レックス達サルベージャー隊は、沈没船の船底にフロートを設置。雲海上ではウズシオからクレーンを搭載した巨神獣船が分離し、アームを下ろし船体を掴む。そしてフロートが膨らみ、沈没船はゆつくりと雲海上に姿を見せた。

—————

く古代船 上部甲板く

引き上げ作業が終わり、レックスと天馬は上部甲板で内部探索の準備をしていた。そこへ、ウズシオからニア達がやってきた。

ニア

「見事な手際だった。中々やるじゃん！」

レックス

「本業を舐めるなッて！」

メツ

「……………さて、んじや行くか。」

メツ・シン・ザンテツは船内へと向かう。すると、シンが突然足を止めレックスと天馬を見た。

シン

「お前達も来い。」

天馬・レックス

「えっ?」

ニア

「来いッて……………まさかシン、コイツらも連れて行く気?」

メツ

「お前らだけじゃ不安なのさ。ハハハッ！」

メツは笑いながら答え、天馬とレックスは少し動揺しながらニアとビヤツコと共に後

に続いた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
:

第四話

↳古代船 通路↳

レックスと天馬はシン達と共に、古代船の船内探索を行っていた。

天馬

「これは……………」

レックス

「予想はしてたけど、やっぱりか……………」

だが長い間雲海に沈んでいた影響か、船内はモンスター達の住処と化していた。

ニア

「ドライバーの力、見せてあげるよ！」

そう言うとニアは両手にツインリング型のアーツを、メツは商会長室で見せた剣を、シンは背中の中の日本刀を、レックスは腰の剣を装備し構える。天馬もボールを地面に置き、戦闘態勢に入る。

メツ

「行くぜ！」

シン

「参る！」

メツとシンが先陣を切つて突入し、レックス達も後に続いた。レックス達の存在に気付いたのか、モンスター達も一斉に襲い掛かって来た。

メツ

「ザンテツ！」

ザンテツ

「あいよ！」

ニア

「ビヤッコー！」

ビヤッコ

「承知！」

ザンテツはメツの、ビヤッコはニアの持つアーツにエネルギーを送る。二人のアーツは蒼い刃を展開し、モンスターを次々と斬り倒して行く。

レックス

「スツゲエ！俺も負けてられない！」

レックスとシンも剣を振るい、モンスターを倒す。

天馬

「セイヤー！」

バーン！

天馬もボールをシュートし、モンスター達を一斉に吹き飛ばす。

ドーン！

すると、天井を突き破り巨大なモンスターが天馬達の前に現れた。

天馬

「あれは、カリブ・シユリブ!？」

現れたのは以前天馬とレックスが昼食にしたモンスター、カリブ・シユリブだったが、以前遭遇したカリブ・シユリブよりも遥かに巨大であった。

レックス

「この前食ったのよりメチャクチャでかい……………」

ニア

「えっ？アンタまさか、アイツ食べるの？」

レックス

「ああ、鋏を七輪で焼いて食うと凄く美味しいんだよ？」

ガキーン！

カリブ・シュリブは鋏を振り下ろし、レックスとニアを攻撃。レックスとニアは紙一重で鋏を避けた。

メツ

「おい、呑気にお喋りしてる場合じゃねえぞ！」

メツとシンは剣を振るいカリブ・シュリブを攻撃するが、殻が厚くダメージが中々入らない。

シン

「手応えが無いな……」

レックス

「カリブ・シュリブの弱点は腹だ！そこが一場殻が薄い！」

メツ

「なるほど……ニア、アイツをひっくり返せ！」

ニア

「分かった！ビヤッコ！」

ニアはリングをビヤッコに預け、ビヤッコはリングにエネルギーを集中。強力な水の波動をカリブ・シュリブに発射。

ビヤッコ

「ハアアアア！《ワイルドロア》！」

ワイルドロアはカリブ・シュリブに命中し、カリブ・シュリブは吹き飛ばされひっくり返った。

メツ

「止めだ！」

ザシユツ！

メツがその隙にカリブ・シユリブの腹に剣を突き刺し、カリブ・シユリブの息の根を止めた。

天馬

「ふう、手強かったね……………」

レックス

「ああ……………それにしても、やっぱドライバーは頼りになるなあ！さっきのビヤツコの必殺技も、凄かったよー！」

ビヤツコ

「お褒めに預かり、光栄です。」

ニア

「あんな雑魚相手に浮かれてんじやないって。」

メツ

「おい、ガキ共がいつまでもじゃれ合ってんじやねえよ！行くぞ？」

そう言うのと、メツ達は奥へと歩き始める。ニアは先程のメツの態度が少し気に入らない様だ。

ニア

「ちつ、年上がみんな偉いのかよ……………」

レックス

「じつちゃんは、年寄りには敬えって言ってたぞ？」

ニア・天馬

「年寄り？」

そう言うのと、四人はメツとシンに目を向ける。四人とも考えが同じだったのか、瞬く間に大爆笑となった。

メツ

「なあシン、俺達のこと年寄りだつてよ？」

シン

「長生きと言う意味でなら、あながち間違いではなからう。」

メツ

「ハハハッ、確かに！」

くシステム制御室く

一同は船内を奥へと進み、システム制御室に到着した。制御室の奥には巨大な大扉があり、扉には謎の紋章が刻まれていた。

メツ

「見ろよシン、あの紋章。」

シン

「間違いない、《アダルの紋章》だ。」

天馬

「アダルの紋章？」

レックス

「何の事だ？」

レックスと天馬は扉に刻まれた紋章をじつと見る。

シン

「扉を開けろ。」

レックス

「えっ?！」

突然のシンの要求に、キョトンとするレックス。

シン

「この扉は、お前達でなければ開かない。」

レックス

「俺達でなければって、そもそもこれどうやって……………」

ブオン

レックス

「ん?」

レックスが謎の紋章に手を翳した途端、謎の紋章が反応し発光。扉が開き、その先の通路の奥にもう1つの扉が出現した。

レックス

「開いた!?あの紋章、扉を開けるスイッチだったのか。」

レックスは扉の先へと進み、もう1つの扉へと向かう。通路には泥棒避けだろうか、レックスの足元には電気が走っていた。

メツ

「やっぱりか。」

ブオン

レックスは奥の扉に到達し、再び紋章に手を翳し扉を開け、更に奥へと進む。

天馬

「レックス、ちよつと待つてよ！」

天馬は慌ててレックスを追いかけ、シン達もゆつくりと後に続いた。

—————

く古代船 最深部く

レックスは一人、通路の先にある部屋に到着した。

レックス

「な、何だアレは!?!」

レックスの目の前には何かの装置だろうか、巨大な機械。そしてその機械の中に、紅の美しい少女が眠っていた。そしてその前には、翠玉色に輝く十字形のクリスタルが埋め込まれた紅色の剣が刺さっていた。

レックス

「女………の子?」

天馬

「レックス!」

と、そこへ天馬が息を切らしながら合流。

天馬

「よかった、やっと追い付………えっ? 女の子? どうして………」

天馬も機械の中の少女に気付いた。そこへ少し遅れて、ニア達も合流した。

メツ

「おいシン。」

シン

「間違いない、《天の聖杯》だ。」

ニア

「天の、聖杯？」

天馬

「もしかして、コレが目標物………レックス？」

レックスは天馬の声に応じず、少女の前にある剣をじつと見ていた。そして、レックスはまるで吸い込まれる様に、剣に埋め込まれたクリスタルに手を伸ばす。

メツ

「小僧、それに触るな！」

レックス

「ツ!!」

メツの叫び声でレックスは我に帰る。だがその拍子で、レックスの指先がクリスタル

に触れてしまった。

グサツ！

レックス・天馬・ニア

「っ!？」

そして次の瞬間、シンが刀でレックスの胸を貫いた。

レックス

「な、何で……………」

シン

「悪く思うな、せめてもの情けだ。この先の世界を見ずとも済む様にな。」

シンはレックスから刀を引き抜き、直後に紅の剣を破壊。心臓を貫かれたレックスは大量の血を流し、意識を失い倒れた。

天馬

「レックス……………？レックス！しっかりしてよレックス!!おい!!」

天馬は必死にレックスに呼び掛けるが、レックスは既に亡き者となっていた。

ニア

「シン！何故……………」

天馬

「何故レックスを殺した!?レックスが何をしたって言うんだ!？」

ニアが問いかける前に、天馬がシンに向けて叫んだ。今の天馬は、大切な友を目の前で殺された事による怒りで満ちていた。

シン

「……………」

天馬

「答えろ!!」

天馬はレックスの剣を装備し、シンに襲いかかる。だがそこへメツが立ちはだかつた。

メツ

「つたく、面倒掛けさせんじゃねえよ！」

ドーン！

メツは剣を振るい、突風を発生させ天馬を吹き飛ばす。天馬は壁に激突し倒れた。

メツ

「聖杯を運び出すぞ。ニア、《モノケロス》を呼べ。」

ニア

「……………」

ビヤッコ

「お嬢様……………」

ニアは憤りを感じ、拳を強く握る。

天馬

「待て……………くそ……………」

天馬は気を失い、メツ達は少女が眠るカプセルを回収し、レックスと天馬を残しその場を後にした。

「……………天馬！おい、しっかりしろ！」

天馬

「っ!？」

気を失っていた天馬は、誰かの呼び声で目を覚ました。

天馬

「俺は……………」

「良かったあ、どうやら大丈夫みたいだな？」

視界がハッキリし、声の主が姿を見せた。

天馬

「レックス……………レックス!？」

天馬はレックスの顔を見るなり仰天し飛び起きた。

天馬

「どうしてレックスが!？俺、もしかして死んだ!？」

レックス

「落ち着けて、俺も君もちゃんと生きてるよ。」

レックスは優しい笑みでそう言うが、天馬は動揺していた。目の前で胸を貫かれた友が、生きていたのだから。

天馬

「で、でもレックスは確かに……………ん？」

と、天馬はある事に気付いた。レックスの右手には先程、シンによって破壊された筈の紅の剣。そして彼の胸元には、剣と同じく翠玉色に輝くクリスタルがあった。

天馬

「レックス、そのクリスタルは？それにその剣……………」

レックス

「これ？ああ、これについては話せば長くなる。それよりも、今は急いで甲板に戻らないと！このままじゃ商会のみんなが危ない！」

そう言うと、レックスは走り出した。

天馬

「レックス!?!ちよつと待つて……………ん?」

天馬も慌てて立ち上がり急いで追いかける。だが突然、後ろから何かを感じた。振り向くと、先程まで紅の剣が刺さっていた場所に、また別の剣が刺さっていた。禍々しい黄金の刃と謎のエンブレムを持つ紫色の剣だ。

天馬

「何だこの剣……………さっきまで何も無かった筈なのに……………」

天馬は柄を掴み剣を引き抜く。すると、辺りの景色が一瞬にして真っ暗になった。

天馬

「な、何だ!?!」

「……………時は来た。」

すると、又しても誰かの声がする。声がする方向に目を向けると、そこにはクリスが居た。

天馬

「クリス！」

クリス

「天馬、これより俺は君のブレイドだ。君が持つその剣、《闇黒剣月闇》が俺のアーツであり契約の証。その剣を振るい、あの二人を倒せ。」

天馬

「あの二人………ひよつとして、シンとメツの事？」

クリス

「あの者達をこのまま野放しておけば、何れこの世界は滅亡する。」

天馬

「め、滅亡!?!」

クリス

「だがまだ希望はある。天の聖杯と契約を交わしたあの少年、レックスだ。」

クリスの発言に天馬は驚いた。

天馬

「レックスが、希望………？でも、天の聖杯と契約って………」

クリス

「問おう。天馬、俺のドライバーとなり、かの者達から世界を守るために戦ってくれるか？」

天馬

「いや分かんないよ、第一レックスが世界の希望って………」

クリス

「お前は、誰かが傷付く様をただ見ているだけの人間か？」

天馬

「えっ？」

キイイイイン！

突然、闇黒剣月闇のエンブレムが光り出し、真っ暗だった空間が燃え盛る炎の空間へと変わった。そこには逃げ惑う大勢の人々、瓦礫に埋も息を引き取った人々、そして天から降り注ぐ幾つもの光の筋が見えた。

天馬

「これは!？」

クリス

「闇黒剣月闇が見せている未来の災いの様子だ。あの者達をこのまま野放しておけば、世界は何れこのような末路を辿る。先程の、レックスの様に……………」

天馬

「っ!？」

天馬は思い出した。先程、レックスがシンに殺された瞬間を。

クリス

「改めて問おう。俺のドライバーとなり、世界を守るために共に戦ってくれるか?」

天馬

「……………クリス、俺やるよ。俺、君と一緒に戦う！もうレックスを……………大事な友達を失いたくない！」

クリスの問いに天馬は答えた。その答えと覚悟に嘘偽りは無い……………彼の瞳を見て、クリスはそう感じた。

クリス

「……………分かった、汝の覚悟聞き入れたり。これより俺は汝のブレイド。そして汝は俺のドライバーだ。」

天馬は月闇を上下反転させ、クリスは柄の先に手を置く。

キイイイイン！

闇黒剣月闇が光り出し、辺りは目映い光に包まれた。光が収まると、そこは先程まで居た古代船の最深部。右手には月闇、左手には鉄仮面を被った紫の邪龍が描かれた紫色の本。そして隣には、クリスの姿があった。

天馬

「……………来い、ジャアクドラゴン！」

天馬は左手に持つ紫色の本、《ジャアクドラゴンワンダーライドブック》の表紙をゆつくりと開く。表紙の下には、炎を吐く鎧の邪龍が描かれていた。

『かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのは、たった1体の神獣だった……………』



く古代船 上部甲板く

その頃、未だに嵐吹き荒れる上部甲板にはメツ達が居た。周囲には商会の人間達も居る。商会の人間達は、メツが持つカプセルを見ている。

メツ

「ニア、殺れ。」

突如メツがニアに指示を出した。だが、ニアはその指示を聞いて耳を疑った。

ニア

「えっ？殺れって……………」

メツ

「ソイツらの命の代金は既に払ってある。俺達が天の聖杯を手に入れたって話を知る人間は、少ない方が何かと都合が良いからな。」

ニア

「で、出来ないよ！だって、この人達は関係ないじゃん！」

メツ

「可笑しな事を言うなあ……………お前、自分が何のために此処に居るのか忘れたのか？」

ボウウウ！

メツ・ニア

「っ!？」

突然、メツの持つカプセルが発火し始めた。炎は瞬く間に勢いを増し、カプセル全体を包み込む。

メツ

「何っ!？」

メツは慌ててカプセルを放り投げる。すると次の瞬間、カプセルは粉々に砕け、巨大な火の玉が出現。火の玉は宙を舞い、古代船の最上部に到達。そして炎が消え、胸に翠玉色のクリスタルを持つ紅の少女が遂に目を覚ました。

ドーン!

すると、今度は巨大な火柱が甲板を突き破り吹き出した。そして炎の中からレックスが現れ、レックスは甲板上に着地した。

レックス

「いきなり後ろからとか卑怯じゃないか。それが大人のする事かよ！」

レックスはシンに剣を向け叫ぶ。

ニア

「れ、レックス!？」

メツ

「その剣………小僧、まさか………！」

ギヤオオオオン!

と、レックスが開けた穴から今度は天馬とクリスがジャアクドラゴンの背に乗って姿を見せた。

ニア

「天馬!？」

ビヤッコ

「アレは、ドラゴン？」

天馬とクリスはレックスの隣に着地し、クリスはジャアクドラゴンをブックに戻した。

天馬

「レックス、お待たせ！」

レックス

「天馬！……君は誰だい？」

レックスはクリスに目を向ける。

天馬

「紹介は後だよ。今は……！」

天馬はサルベージスーツを脱ぎ捨て、アースイレブンのユニフォームへと姿を変え

る。

キイイイイン！

すると突然、左胸の稲妻マークが発光し、空に向けて光の筋を放つ。光の筋は一瞬にして雲を消し去り、美しい星空と満月を出現させた。

キラーン

すると今度は月から一筋の白い光が放たれ、光は天馬の目の前に到達。空に輝く満月の如く白銀色に輝く美しい剣が現れた。

天馬

「これは……！」

『《幻想剣月神（げんそうけんげつか）》！』

メツ

「おい、何だ今の？」

シン

「分からも、月から剣が放たれ……………いや、呼び寄せられたのか？あの少年に……………」

天馬は月闇をクリスに預け、幻想剣月神を引き抜き右手に装備。同時に天馬の腰に謎のベルトと、ベルトの両サイドに2つのホルダーが出現した。

レックス

「行くよ、《ホムラ》！」

ホムラ

「はい！」

天馬

「行くぞ、クリス！」

クリス

「おう！」

紅の少女《ホムラ》は飛び降り、レックスの隣に着地。天馬・レックス・クリスは剣を構え、4人は一斉に走り出す。

天馬・レックス

「うおおおおおおお!!」

天馬とレックスは全速力でシンに襲いかかる。

ガキーン!

だが、そこに立ちはだかるメツ。

メツ

「悪いな、アイツの力をそう易々と使わせる訳にはいかないんだ。俺が相手してやる!」

メツは剣を構え、レックス・天馬と激しく刃を交え火花を散らす。

ザンテツ

「来いよ、天の聖杯！それから、そうだな……邪龍使い！」

クリス

「まあ今はそれで良い。行くぞ！」

ザンテツもホムラ・クリスに襲いかかる。その様子を、少し離れた位置からニアとビヤツコが見ていた。

ニア

「止めなよメツ！相手は子供じゃないか！」

メツ

「子供だあ？冗談は止しな！コイツはもう、とつくに天の聖杯のドライバー。それにアイツも、既に立派なドライバーだ！」

メツはレックスと天馬を蹴り飛ばし、剣の上空へと投げた。

ザンテツ

「行くぜ！」

ザンテツが大きくジャンプし剣を受け取り、ザンテツは二人に向けて斬撃を放つ。

天馬

「しまった！」

クリス

「させるか！」

だが次の瞬間、レックスの前にホムラ、天馬の前にクリスが現れバリアを展開。ザンテツの斬撃を防いだ。

レックス

「ありがとうホムラ！」

ホムラ

「どういたしまして、レックス。」

天馬

「クリス、助かったよ……」

クリス

「御安い御用だ。ここからは出し惜しみ無しで行くぞ！」

『ジャアアクドラゴン！』

クリスはジャアアクドラゴンワンダーライドブックを手に取り、月闇に翳す。

『ジャアクリード！』

月闇からダークな待機音が流れ、クリスの腰に天馬の物とは異なるベルトが出現。クリスはベルトにブックをセットし、月闇の柄の先でベルト上部のボタンを押し込みブックを展開。展開したページには、ジャアアクドラゴンと同じ鉄仮面をした紫の騎士が描かれていた。

『闇黒剣月闇！』

クリス

「変身!」

クリスの背後に巨大なジャアクドラゴンワンダーライドブックが出現し、中からジャアクドラゴンが出現。ジャアクドラゴンはクリスと融合し、左肩にジャアクドラゴンヘッド、顔に鉄仮面を装着。ワンダーライドブックに描かれていた騎士へと姿を変えた。

『Get go! under conquer! than get keen! ジャアクドラゴン!』

レックス・ニア・ホムラ・ビヤッコ・メツ・ザンテツ

「変身した!」

シン

「何っ!?!」

天馬

「あれは……………!」

天馬はクリスの姿に覚えがあつた。それはレックスと出会う前、謎の廃墟で見つけた本に描かれていた闇の剣士カリバー。

『月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！』

カリバー（クリス）

「その身に刻め、我の名を！我は邪龍の力を宿し闇の剣士、《仮面ライダーカリバー》！」

メツ

「仮面ライダーだと？」

カリバー（クリス）

「天馬！」

天馬

「ああ、分かつた！」

天馬とカリバーは剣を構え、メツとザンテツに向かつて走り出す。

ザンテツ

「シャアアア!!」

ザンテツは無数の斬撃を飛ばすが、2人は走りながら剣を振るい斬撃を打ち消した。そして天馬はメツ、カリバーはザンテツに剣を振るう。

レックス

「みんな今のうちに！早く！」

その間にレックスは周囲の人々に声を掛け、ウズシオへ誘導する。

メツ

「逃がすかよ！」

メツは大きくジャンプし、ザンテツから剣を受け取る。そして古代船艦橋付近に着地し、剣先をウズシオに向ける。

『月闇居合！』

『月神居合！』

天馬・カリバー（クリス）

「お前の相手は俺達だ！」

天馬とカリバーはお互いの剣を腰のホルダーに納刀し、柄のトリガーを押す。

『読後一閃！』

そして2人同時に抜刀し、白と紫の斬撃をメツに向けて放つ。

メツ

「チィ！」

メツは剣で斬撃を防ぐ。だがその時、上空にはレックスとホムラが居た。

天馬

「行け！レックス！」

レックスとホムラは共に剣を持ち、炎の大剣を作り出す。そして落下の勢いと共にメツに向けて剣を振り下ろした。

レックス・ホムラ

「《バーニングソード》!!」

ドカーン！

剣がメツに到達した途端、艦橋全体が炎に包まれた。だが炎が消えると、ザンテツの力を借りて剣を盾に変化させ、レックスとホムラの攻撃を受け止めるメツの姿があった。

メツ

「小僧、何でお前みたいなガキがと思ったが……なるほど納得だ。」

メツはレックスの瞳を見る。

メツ

「その瞳の色……もつと注意しておくべきだった……」

レックス

「何の話だ！」

メツ

「教えるかよ！」

メツはレックスとホムラを押し返し、4人は甲板上に降り立つ。それと同時にウズシオへの収容が完了し、ウズシオは全速力で海域を後にした。

メツ

「……やるじゃねえか、天の聖杯をそこまで扱えるとは……だが！」

ドーン！

天馬・レックス

「どわああああ!!」

メツは天馬とレックスに衝撃波を放ち、天馬とレックスを吹き飛ばした。

ホムラ

「レックス！」

カリバー（クリス）

「天馬！」

ホムラとカリバーは助けに向かおうとするが、そこにザンテツが立ちはだかった。

レックス

「くっそう……………」

天馬

「クツ………」

メツ

「調子に乗るなよ、ガキが！」

天馬とレックスは打ち所が悪かったのか思い通りに動けない。メツは剣を構え、天馬とレックスに近づくと突如、メツの前にビヤッコとニアが現れた。

メツ

「何で邪魔をする!? 頭イカれてんのかニア!?」

ニア

「イカれてんのはそっちだろ!? 子供相手に！」

カリバー（クリス）

「隙あり！」

ガキーン！

メツの背後からカリバーが現れ、メツを襲う。だがメツは即座に身体をカリバーに向け攻撃を防いだ。

メツ

「甘い！」

ホムラ

「ハアアアアア!!」

さらにビヤッコの影からホムラが現れ、ホムラは剣を持ちメツと刃を交える。

メツ

「寝起きにしちや、良い太刀筋してんじゃねえか！思い出すぜ、500年前を………」
「その姿」 どういうつもりだ？やはり目指すか、樂園を！」

ホムラ

「それが、私達の望みです！」

メツ

「なら、させる訳にはいかねえな！」

ガキーン！

メツは力を込めホムラを突き飛ばす。ホムラは宙返りをし、レックスの隣に着地した。

ゴゴゴゴゴゴ……

だがそこへ、巨大な謎の黒い戦艦が姿を見せた。

天馬

「アレは!？」

巨大戦艦は砲台を出現させ、照準をレックス達に向ける。

カリバー（クリス）

「危ない！」

レックス・天馬・ホムラ

「っ!？」

ズドーン!ズドーン!

戦艦はレックス達に向け集中砲火を開始。

ニア

「やらせない!」

だが3人の前にニアとビヤッコが現れ、ビヤッコがバリアを展開し集中砲火を防いだ。

ニア

「ニャアアア!？」

ビヤッコ

「お嬢様!」

だがニアが爆風で吹き飛ばされ、雲海へと落ちて行く。

レックス

「ニアー！」

レックスは走り出し、雲海へとダイブ。右手でニアの腕を掴み、左腕のアンカーを古代船に向けて射出。2人は船体に宙吊りになった。

メツ

「しづといな小僧……だがそれも此処までだ！」

戦艦は全ての砲台の照準をレックスとニアに向ける。

ドカーン！

突然、砲台に巨大な火球がぶつかり砲台が破壊された。

メツ

「何だ!?!」

その場に居た全員が辺りを見回す。すると戦艦の後方から、1体の巨神獣が巨大な翼を飛ばたかせ現れた。

天馬

「セイリユウさん!?!」

レックス

「じつちゃん!?!」

セイリユウは上空を旋回し、レックスの元へ向かう。

セイリユウ

「乗るんじゃレックス!!」

天馬

「レックス!!」

更にセイリユウと並走する形で、天馬が船体を駆け降りていた。

天馬

「ハアアアアア!!」

天馬は全身に目映いオーラを纏い、自身を黄金の鬘を持つ白いペガサスへ変身させた。

ペガサス（天馬）

「レックス、来い!!」

レックス

「分かった!!」

レックスはタイミングを見計らい、ニアと共にペガサスの背中に飛び乗る。更にペガサスはセイリユウの背中に、同時にビヤッコとホムラもセイリユウの背中に飛び乗っ

た。セイリユウは古代船の上部甲板に目を向け、シンをメツを見る。

セイリユウ

(シンよ、お前はまだ……アレは、メツか!?)

シン

「セイリユウ……」

メツ

「逃がすな! 撃て!」

メツの指示で、戦艦は全ての砲台をセイリユウに向ける。

カリバー(クリス)

「させるか!」

カリバーは古代船から戦艦に飛び移り、月闇にジャアクドラゴンワンダーライドブツクを翳す。

『必殺リード！ジャアクドラゴン！』

そしてトリガーを押し、月闇を甲板に突き刺す。

『月闇必殺撃！習得一閃！』

突き刺した途端、甲板下から紫の炎が吹き出し全ての砲台を破壊。砲台が破壊された事を確認すると、カリバーはタイミングを合わせセイリユウの背中に飛び乗った。

セイリユウ

「行くぞ、落ちるなよ！」

セイリユウは力を振り絞り、夜空の彼方へと飛び去った。

メツ

「チツ、奴ら逃げ切りやがった……………」

シン

「戻るぞ、メツ。」

メツ

「追わないのか？」

シン

「目覚めたのなら、それで十分だ。後はヨシツネに探らせる。」

メツ

「フンツ、そうかい……………」

古代船に残されたメツは一人、セイリユウが飛び去った方角の景色を眺めていた。

メツ

「にしても仮面ライダーか……………コイツは、久し振りに面白くなりどうぞだぜ？」

To Be Continued…

第五話

天馬

「……………う、うゝん？」

気が付くと、天馬は仰向けで地面の上に倒れていた。

「気が付いたか？」

そこへ、聞き覚えのある誰かの声が聞こえてきた。天馬はゆっくりと立ち上がり辺りを見回すと、そこは巨大な木々が生い茂る森の中だった。

天馬

「此処は、森？」

「恐らく、何処かの巨神獣に流れ着いたのだろう。」

と、今度は上から声がする。天馬が顔を上げると、木の枝の上にクリスの姿があつた。

天馬

「クリス！」

クリス

「どうやら、怪我の心配は無さそうだな。」

クリスは飛び下り、天馬の前に着地。左手に持っている幻想剣月神を天馬に渡した。

クリス

「ほら、お前の剣だ。」

天馬

「この剣、確かメツと戦った時の……」

ガキーン！ガキーン！

突然、遠くから激しくぶつかる様な金属音と、モンスターの雄叫びが聞こえてきた。

天馬

「この音は？」

クリス

「大気中のエーテルが震えている……ブレイドとドライバーが戦っているんだ。」

天馬

「ブレイドとドライバー、きつとレックスだ！行こう！」

天馬とクリスは音のする方向へと走り出す。音を頼りに進むと、レックス・ニア・ホムラ・ビヤツコが大型のモンスター《ワームイーター・グロッグ》と戦っていた。

天馬

「レックス達だ！助けなきゃ！」

クリス

「了解した！」

天馬とクリスは走り出し、クリスは闇黒剣月闇にジャアクドラゴンワンダーライドブックを翳す。

『必殺リード！ジャアクドラゴン！』

そしてトリガーを押し、紫色の斬撃を放つ。

『月闇必殺撃！習得一閃！』

斬撃はワームイーター・グロッグに命中し、ワームイーター・グロッグは怯んだ。

天馬

「レックス！ニア！」

レックス

「天馬、無事だったのか！」

天馬とクリスはレックス達と合流し、2人はワームイーター・グロッグと対峙する。

クリス

「天馬、これを使え！」

クリスは天馬に2冊のワンダーライドブック、西遊記の三蔵法師御一行が描かれた茶色のワンダーライドブック《西遊ジャーニー》と、空を飛ぶ大鷲が描かれた赤いワンダーライドブック《ストームイーグル》を天馬に渡した。

『イーグル！フムフム……………』

『西遊ジャー！フムフム……………』

天馬はストームイーグルブックと西遊ジャーニーブックを月神の剣先に翳す。

『習得二閃！』

そしてトリガーを引いて剣を振るい、猛烈な竜巻を起しワームイーター・グロツグ

を上空に吹き飛ばす。更に月神を如意棒の様に長く伸ばし、野球のバッターの様に構える。

天馬

「飛んでけ！」

カキーン！

そして竜巻が消え落下してきたワームイーター・グロツグをフルスイングで雲海に向けて打ち飛ばし、ワームイーター・グロツグは遙か彼方の雲海に落ちた。

天馬

「よし、一丁上がり！遅くなってゴメン……………」

レックス

「良いよ、お陰で助かった。」

ニア

「アンタ達、何で……………って、聞くまでも無いか……………」

レックス

「みんな無事で良かったよ。」

ニア

「アンタ達もね。ところで、あのデツカイ奴……あの巨神獣は？」

天馬

「そう言えば、セイリユウさんは一緒じゃないの？」

「ワシの事かのお？」

何故かレックスのヘルメットからセイリユウの声がする。すると、ヘルメットの中から小さな可愛い巨神獣が姿を見せた。

天馬

「もしかして……セイリユウさん!？」

ニア

「ええっ!? ウソ、何で!？」

天馬とニアは、あの大きなセイリユウが此処まで小さくなつた事に仰天した。

レックス

「まあ、此方は此方で色々………何処か落ち着ける所に行こう。話はそれからだ。」

ホムラ

「そうですね、行きましょう。」

それから少しして夕方、一行は池の側でキャンプをする事となつた。

クリス

「すまないが、見張りを頼む。」

レックスと天馬は周囲から枝をかき集め火を起こし、クリスは表紙に黄色いケルベロスが描かれた黄色いワンダーライドブック《トライケルベロス》を使いケルベロスを召喚、更にジャアクドラゴンブックでジャアクドラゴンを召喚し、辺りを見張らせた。

ニア

「アンタ、クリスって言ったっけ？ 凄いな、アンタのその剣と本。モンスターを召喚出来て、おまけに変身までしちゃうなんて……あんなの今まで見たこと無いよ。」

クリス

「この本はワンダーライドブック。遙か昔、世界を創つたとされる1冊の本がバラバラに分割され、その断片から生まれたとされるモノだ。この本を俺や天馬が持つ聖剣と組み合わせる事で、聖剣と本の力を發揮する事が出来る。古代船で俺が見せた変身もその1つだ。」

レックス

「世界を創つた本か……ホムラや楽園と何か関係あつたりするのかな？」

クリス

「そこまでは俺にも分からない。俺の得た知識で分かるのは、この聖剣とワンダーライドブックが作られたのは今より遙か昔だということだけだ。」

ビヤッコ

「アルストが出来る以前から存在していたという可能性も、ゼロでは無い訳ですか？」

レックス

「そう言えば、天馬の持つてる剣もその聖剣なのか？」

レックスは天馬の持つ月神を指差した。

クリス

「月の力を宿し幻想の聖剣、その名も幻想剣月神……ある一人の刀鍛冶が生涯を掛けて作り上げたときされる、伝説の聖剣の1つだ。ただ作り上げたという記録がなく、実在するかどうかまでは不明だったのだが、まさか実在していたとは……」

天馬

「それより、俺はレックスの方が気になるよ！シンに殺されたと思つたらドツコイ生きてたし、セイリユウさんはこんなに小さくなっちゃつてるし、それに君……ホムラだっけ？シンやメツは天の聖杯とか言つてたけど、いったい君は何者なの？」

レックス

「うーん……少し長くなるけど、良いかな？」

レックスは話し始めた。ホムラの正体は、天の聖杯の異名を持つ特別なブレイド。古代船でレックスがメツに胸を刺貫かれ亡き者となった後、レックスはホムラが楽園と呼ぶ記憶の世界で彼女と出会った。ホムラはレックスに自分を楽園に連れて行ってほしいと頼み、レックスはそれを聞き入れた。そしてホムラは自分のコアクリスタルの半分

をレックスに預け、レックスはホムラの願いを叶えるため、ホムラのドライバーとして復活した。

一方セイリユウは戦闘で受けたダメージが酷く、レックスが見つけた時には既に瀕死の状態だった。そこで、セイリユウは全身の代謝を最大限にして身体機能維持を行い一命を取り留めた。だがその結果、今の様な幼生体にまで退行してしまったらしい。(ちなみにセイリユウ曰く全ての巨神獣に出来る芸当では無いらしく、元の姿に戻るには300年掛かるらしい。)

ニア

「なるほど、その子と樂園にねえ……………そう言えば、ちゃんと御礼言えてなかったね。ありがとう、助けてくれて……………」

ビヤツコ

「感謝致します、巨神獣様。私達を此処まで運んで頂いて。」

セイリユウ

「礼には及ばん。お前さん達も、レックスと天馬を助けてくれたんじゃからのお。」

と、セイリユウはレックスに目を向ける。

セイリユウ

「じゃがレックス、そもそもお前が訳も分からん仕事を引き受けおつたのが原因じゃろが! 『じつちゃんは、ここでゆっくりしててよ』等とぬかしおつてからに……!」

レックス

「ハイハイ分かりました、俺が全部悪いんです。すみマセンでしたゴメンナサイ(棒読み)。」

適当に謝るレックス

セイリユウ

「何じゃその態度は!?! 反省の色が全く見えん!」

レックス

「そりゃ出来ないよ。だって俺があそこに居なかつたら、ホムラはアイツらの言いなりに……!」

ホムラ

「レックス……!」

レックス

「そんなの絶対ダメだ……アイツらにホムラは渡せないよ！」

天馬

「そうだね、レックスの言う通りだ。」

セイリユウ

「ううむ……」

呆れながらもレックスの言うことを否定できないセイリユウであった。そして夜、レックス達が眠りについた頃……

ホムラ

「……………」

ホムラは一人、池の畔に立ち樹を眺めていた。そこへ、天馬とセイリユウがやって来た。

天馬

「ホムラ?」

セイリユウ

「何じゃ、まだ起きとつたのか?」

ホムラ

「はい、中々寝付けなくて……」

天馬はホムラの隣に立ち、セイリユウは天馬の頭に止まった。

ホムラ

「お久しぶりですね、セイリユウさん。」

天馬

「えっ?もしかして、2人とも知り合いだったの?」

ホムラとセイリユウが面識がある事に驚く天馬。

セイリユウ

「まあ昔ちーとな。しかし、昔とは随分と印象が変わったのう……」

ホムラ

「色々、ありましたから……………」

セイリユウ

「レックスに命を分け与えてくれた事、礼を言おう……………その上で聞きたい。レックスにした話、アレは本意か？」

ホムラ

「はい、私の本当の気持ちです。」

セイリユウ

「そうか……………ならば信じよう。他の誰でもない、お前さんの言葉を……………」

ホムラ

「でも、もう1つ目的が出来ました。シンとメツ、2人を今のままにしておく事は出来ない……………」

セイリユウ

「宿命じゃな、天の聖杯の……………」

天馬

（天の聖杯……………ホムラの宿命？ どういう事だろう……………）

セイリユウ

「……………巻き込むのか？レックスを……………」

ホムラ

「……………」

セイリユウの問いに、ホムラは口を閉ざし。

セイリユウ

「別に責めておる訳では無い。お前さんが望まんでも、レックスは首を突っ込むじゃろう。アヤツは、そういう子じゃ……………ホムラ、天馬、レックスを頼むぞ。」

ホムラ・天馬

「……………はい！」

夜空には無数の星がキラキラと輝き、月の光が3人を優しく照らす……………夜が明け翌朝、レックス達は無事に全員起床。クリスはジャアクドラゴンとケルベロスをブックへ戻した。

レックス

「さて、取り敢えず近くの街か村にでも………と思っただけど、そもそも何処だ此処………？」

ニア

「《グーラ》だよ。」

レックスの問いに真つ先に答えたニア。

天馬

「グーラ？」

ニア

「そ、スペルビア帝国グーラ領。グーラの巨神獣は見たことあるだろ？」

レックス

「ああ、遠くからなら何度か………なるほど、此処がグーラなのか。」

ニア

「そのお腹辺りだね。道なりに進んで森を抜ければ、多分平原に出る。その先に街がある筈だよ。」

レックス

「詳しいんだな………ん？」

レックスがニアの姿を見て、ある事に気づく。

レックス

「その耳………もしかしてグーラ人？」

ニア

「遅いよ！今頃気づいたのか………？」

ビヤッコ

「グーラは、お嬢様の故郷なのです。」

クリス

「なるほど、それは心強い。」

こうして、一行はニアの案内で平原を目指して歩き出した。

—————

く グーラ領 ゴルドア大平原く

歩き出して数十分、一行は深い森を抜け、巨大な平原へと到着した。平原の向こうには大きな街があり、更にその向こうには巨大なグーラの巨神獣の頭部が見える。

天馬

「凄い！」

ホムラ

「うわあ、ものすごく広い平原！」

セイリユウ

「壮観じゃのう！」

クリス

「コイツは感動モノだ………！」

レックス

「ああ、じつちゃんの狭い背中とは大違いだ！」

セイリユウ

「ムムツ、一言余計じゃわい！」

平原の迫力と景色に感動するレックス達。

ニア

「ここは《ゴールドア大平原》。あつちに見えるのが、グーラ最大の街《トリゴ》。取り敢えず街まで送つてく。着いたら、アタシの役目は終わりだ。」

天馬

「終わり？何で？」

ニア

「何でって、アタシはアンタらと一緒に居ることは出来ないからね。」

レックス

「出来ないって……アイツらの事があるからか？」

レックスの言うアイツらとは、シンとメツの事。だがレックス達は知っている。2人は古代船で、仲間である筈のニアを殺そうとした事を。

ニア

「日は浅いとは言え、一応仲間だし……………」

レックス

「仲間？ニアを殺そうとした奴だぞ？」

レックスの問いに、ニアは悲しい表情を浮かべた。

ニア

「それでも、アタシの居場所は彼処しかないんだ……………」

レックス

「ニア……………」

クリス

「……………」とところで、此処から街までは歩くのか？」

突然クリスが口を開き、トリゴの街を指差した。

ニア

「えっ？そりゃ、歩く以外に方法無いだろ？」

クリス

「なら、コレを使わせてくれ。」

そう言うと、クリスはジャアクドラゴンブックを手に取り表紙を開く。そしてジャアクドラゴンを召喚した。

天馬

「そっか！よし、なら俺も！」

「そう言うと天馬は全身に目映いオーラを纏い、自身を再び白いペガサスへ変身させた。

レックス

「それ、あの時の！」

ペガサス（天馬）

「コレは《ソウル》。簡単に言うなら、俺の中にある獣の力さ。レックス、ホムラ、俺の背中にどうぞ。」

レックス

「良いの？ありがとうございます！」

ホムラ

「ありがとうございます！」

クリス

「ニア、ビヤッコ、2人は俺と一緒にジャアクドラゴンに乗れ。」

ビヤッコ

「お心遣い、感謝致します。」

ニア

「ありがとう！よろしくね、ジャアクドラゴン！」

レックスとホムラはペガサス、ニアとビヤッコはクリスと共にジャアクドラゴンの上
に乗り、一行はトリゴの街に向けて飛び立った。

To Be Continued…

第六話

くトリゴの街 トリゴのアーチく

飛び立ってしばらく、一行はトリゴの街の入り口に到着した。

レックス

「此処がトリゴの街か。」

ニア

「変わらないな………」

ホムラ

「ニア？」

ニア

「えっ? いや、何でもない! 宿屋まで案内するよ。そこで御別れだ。」

一行はアーチを潜り街に入る。

ニア
「ん？手配書？」

入り口の近くには掲示板があり、そこには3枚の手配書が貼られていた。シン、メツ、そしてニア……………の筈だが……………

ニア
「何じゃこりや!?!もしかして、コレがアタシ!?!」

手配書に描かれたニアの人相書は、実際のニアとは程遠い獣人となっていた。

ビヤツコ

「何とも上手く特徴を捉えた人相書で……………（笑）」

ニア

「えっ？何だって？（ギラリ）」

人相書にコメントするビヤッコをギラリと睨むニア。

ビヤッコ

「い、いえ！どうやら、私とお嬢様の情報がゴツチャになっている様ですね！これは心外………」

レックス

「何？どうした？」

ニア

「ウウウウキイイイイ!!」

ビリビリビリッ！

よっぽど自分の人相書に腹が立ったのか、ニアはレックス達が見るより先に手配書を細切れになるまでビリビリに破った。

天馬

「……………これは、触らぬ神に祟りなしてやつ？」

ホムラ

「ええ、多分……………」

クリス

「知らぬが仏、言わぬが花だな……………」

「さあ他に勇氣ある者は居ないか!？」

すると、少し奥の方から声がする。声のする方に目を向けると、アヴァリティアで見たのと同じ黒い鎧の兵士数人が、何やら催し物を開き人々を集めていた。呼び掛けを行う兵士の前には、青く輝くひし形のクリスタルが置かれている。

兵士

「君のその勇氣で、明日のスペルビアを支えるんだ! もちろん月々の給料だけじゃない、恩給だって出る! 勲功を積みば爵位だって賜られる! 偉大なるスペルビア皇帝《ネフェル陛下》のために、君の勇氣を見せてくれ! さあ名乗り出よ! 明日の英雄よ!!」

天馬

「何だろう、あの人集り？」

レックス

「あそこに置いてあるのは、コアクリスタルか？」

ニア

「ドライバースカウトだよ。最近じゃ、街中でドライバーを募集してるんだ。」

ビャッコ

「同調出来る者は日々減っています。軍人の中にも居なかったのでしょうか。」

ニアとビャッコが説明するが、天馬とレックスはどうやらちんぷんかんぷんの様だ。

ニア

「まあ、口で説明するより見た方が早いかな？ちよつと覗いてみよ？」

一行は民集の後ろからドライバースカウトの様子を見ることにした。すると……………

「さあ俺に相応しいブレイドよ、力を貸して貰おう！」

1人のグーラ人の男が、自信満々でコアクリスタルに触れた。触れた瞬間、コアクリスタルが強く発光し、男の身体も光りだした。

ニア

「ありや駄目だな……………」

「ゴウファア!!」

天馬・レックス・ホムラ・クリス

「っ!?!」

だが次の瞬間、男は大量の血を吐き、意識を失い倒れた。

兵士

「おおっと、コレは見かけ倒しだ!残念!」

男は兵士達に支えられ、会場から運び出された。レックスと天馬は、目の前で起きた

現象に動揺している。

レックス

「おい、いったい何が起きたんだ!?! さっきのオッサン、血吹き出してたぞ!?!」

ビヤッコ

「コアの負荷に耐えられなかったのですよ。資格の無い者がコアクリスタルに触れると、ああなってしまうのです。」

天馬

「資格? ドライバーになるのに資格が要るの?」

セイリユウ

「適性みたいなモンじゃよ。」

すると、今度は一人のグーラ人の青年がコアクリスタルの前に立った。

少女

「止めなよ兄ちゃん! 危ないよ!」

少年

「兄ちゃんにもしもの事があつたら、僕達どうすれば良いの!？」

青年

「だ、大丈夫だ！兄ちゃん絶対ドライバーになって、お前達に良い暮らしさせてやる！」

彼の兄弟らしき少年少女達の制止を振り切り、青年は勇気を振り絞りコアクリスタルに触れる。触れた瞬間、又してもコアクリスタルが強く発光しだした。

ニア

「おめでどう………かな?！」

すると次の瞬間、青年の身体から光が空に放たれ、コアクリスタルが槍へと姿を変え、青年は徐に槍を掴む。そして放たれ光が少年の側に落ち、ヒト型のブレイドへと姿を変えた。

青年

「やった………やったぞー!!」

少年

「兄ちゃん！」

少女

「やったね、兄ちゃん！」

青年は自分がドライバーになれた事、少年と少女は兄の無事と、兄がドライバーになれた事を大いに喜んだ。

レックス

「コアクリスタルが武器に……………！」

セイリユウ

「ブレイドとは、ああやって生まれて来るんじゃないよ。」

レックス

「えっ？でも俺の場合は……………」

ニア

「アンタの場合は特別。ホムラ、天の聖杯なんだろう？だったら何が起きてても可笑しくないだろう？命分けて貰うとか、もう既に理解不能だし……………」

天馬

「ところで、その天の聖杯ってなに？アイツらも、ホムラの事をそう呼んでたけど……」

ニア

「アタシだって、伝説のブレイドって事しか聞かされてない。って言うか、本人に直接聞きなよ……」

天馬・レックス

「はぁ……」

—————

くオーベラ通りく

その後は叙任式等の面白味のない式典ばかりだったため、一行はスカウト会場を離れ《オーベラ通り》を歩いていった。

レックス

「それにしても、コアクリスタルに触れるとブレイドが生まれて来るなんて、やっぱり凄い

よなああ！」

ホムラ

「私達ブレイドの本体は、コアクリスタルと呼ばれる寶石に似た素子なんです。触れた者に資格があつた場合のみ、自身の体細胞を増殖させて分離体を生み出す……それがブレイドです。」

クリス

「つまり、ドライバーとコアクリスタルが運命的に巡り会つてこそ、ブレイドが誕生すると言う事だ。」

天馬

「不思議だなあブレイドって……でも、何でそんな事が起きるのかな？」

セイリユウ

「さあ、それは誰にも分からん。古から、そういうモノなんじゃ。」

ビヤツコ

「生まれて来るブレイドの容姿は千差万別。人に近いモノものから、私の様なモノもあります。一説によれば、ドライバーの個性や精神が反映されているとも。」

ホムラ

「ドライバーとブレイドとの出会いは、とっても神秘的なんですよ。」

天馬

「……………そう言えば、ホムラもビヤツコもさっきのブレイドも、胸のところにコアクリスタルがあるよね？でもクリスは……………」

クリス

「安心しろ、俺にもちゃんと有るぞ。」

そう言うときクリスは胸の鎧を、何処かのロボット司令官の様に左右に開く。鎧の下には青く輝くコアクリスタルがしっかりと存在していた。

天馬

「あ、ホントだ。」

確認が済むと、クリスは鎧を閉じる。

「一同、抵抗するな！」

すると突然、一行の前後に数人の兵士達が現れた。兵士達は道を塞ぎ、一行を包囲す

る。

セイリユウ

「こやつら、スペルビア軍じゃな！」

レックス

「何なんだお前ら？」

兵士長

「その者、帝国に仇なす反逆者イーラの者であろう？」

レックス

「イーラ？ち…………ニアは違う！」

兵士長

「そうか？白き獣のブレイドを連れた、グーラ人のドライバー……………手配書の人相書にソックリではないか！」

天馬

「人相書？」

兵士長

「ああ、コレだ！」

兵士長は先程、ニアがビリビリに破いた手配書と同じものを見せた。

レックス

「あ、ホントだ似てる。」

天馬

「いや、何処が？」

ニアはレックスに「何だど!？」と襲い掛かり、天馬に「ほら、やっぱりそう思うだろ?？」と言わんばかりの笑顔を見せる。

兵士長

「……………とところでお前達。」

すると、兵士長は天馬とレックスに問いかける。

兵士長

「見たところお前達もドライバーの様だが、登録ナンバーは？」

天馬・レックス

「と、登録？」

兵士長

「すべからくドライバーとなった者は、《アーケディア》に届け出なくてはならない。登録ナンバーが無いと言うことは、さてはモグリのドライバーだな？」

レックス

「モグリ!? 違う、俺たちは……………」

兵士長

「言い訳無用! お前達を連行する! 申し開きは領事閣下の前でするが良い!」

兵士達は全員銃を構え、銃口をレックス達に向ける。

ニア

「レックス、天馬、今からアタシとビヤッコで仕掛ける! その隙に、アンタ達は逃げな!」

レックス

「そうは行かない。アイツは今、お前達って言った。なら無関係じゃいられない。」

ニア

「まったく、相当頑固だねアンタ……じゃあ、いちにのさんで行くよ？アタシ達は左、アンタ達は右だ。」

レックス

「オツケー。」

ホムラ

「何時でも。」

天馬

「クリス、君はニアのサポートを。」

クリス

「心得た。」

レックス・ホムラ・天馬と、ニア・ビヤッコ・クリスは背中合わせになりスperlビア軍と対峙。同時に天馬は左腰の月神、クリスは月闇に手を伸ばす。

ニア

「じゃ、行くよ！」

兵士長

「て、抵抗するのかわ!? 来るのかわ!？」

レックス達が抵抗の意思を見せ、兵士達は怯んだ。

ニア

「いーち……………」

『月闇居合!』

ニア

「にーの……………!」

『月神居合!』

兵士長

「ひ、怯むな！相手は少数！取り囲んで引っ捕らえろ！」

ニア

「さん!!」

『読後一閃!』

天馬・クリス

「てりゃあああああ！」

ドカーン！

ニアの合図と共に、天馬とクリスは同時に剣を抜き斬撃を放つ。斬撃は両者とも兵士達の足元に命中し、砂煙を上げ視界を奪う。

レックス

「たあ！」

ニア

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤー！」

その隙にレックスとニアがアーツを装備し、兵士達を攻撃する。

クリス

「天馬！」

クリスは天馬に、夜空を飛ぶ妖精と少女と少年が描かれた青いワンダーライドブック《ピーターファンタジスタ》を投げ渡した。天馬はブックを受け取り、月神の剣先に翳す。

『ピーターパン！フムフム………習得一閃！』

そして剣から光輝く妖精達を召喚し、妖精達は兵士達をポカポカ殴る等して攻撃。

『必殺リード！ジャアクヘツジホッグ！』

月闇必殺撃！習得一閃！』

クリスはハリネズミが描かれた黄色いワンダラーライドブック《ニードルヘッジホッグ》を月闇に翳し、無数の紫色の針を兵士達に向けて放った。

兵士長

「つ、強い……………」

天馬

「レックス、ニア、今のうちに！」

ボオオオオオオオ!!

突然、レックス達を取り囲む様に、青い炎の壁が出現した。

レックス

「なっ!?!炎の壁!?!」

「騒がしいですね、せっかく束の間の休暇を楽しんでいたのに……」

そこへ炎を通り抜け、1人の女性が静かに姿を見せた。白い肌に青いグラデーションがかかった紫色の髪と、閉じた瞳。そして紫色のドレスを纏った美しい女性のブレイドだった。

兵士長

「か、《カグツチ》様！」

レックス

「カグツチ？」

クリス

「こんな芸当が出来ると言うことは、お前もブレイドだな？ ドライバーは何処だ？」

カグツチ

「私のドライバーは現在、ある任務で遠征中です。今は私1人。」

兵士長

「カグツチ様は、スペルビアの宝珠とも呼ばれる帝国最強のブレイド！ ドライバー無くしてもこの力、観念しろ！」

兵士長はレックス達に向けてそう言うが、レックス達は一步も引く気は無い。

クリス

「こうなつては仕方ない……変身！」

『Get go! under conquer! than get keen! ジャア
クドラゴン!』

クリスはカリバーに変身し、カグツチに襲い掛かる。

カリバー（クリス）

「食らえ！」

カグツチ

「ほう………」

ガキーン！

カグツチは両手に剣を装備し、カリバーの攻撃を難なく受け止める。

カリバー（クリス）

「ナニッ!?!」

カグツチはカリバーを押し返し、カリバーは天馬の隣に着地した。

天馬

「クリスの剣をアツサリと!?!」

カグツチ

「彼、貴方のブレイド? 面白い力ね。」

兵士長

「カグツチ様、この者達はかのイーラの手の者。是非とも、カグツチ様の力を御貸し下さい。」

カグツチ

「イーラの?」

カグツチはふと、ホムラのコアクリスタルに目を向ける。

カグツチ

「翠玉色のコアクリスタル……まさかとは思ったけど……良いでしょう。ですが殺生は禁じます。彼らを生きたまま捉えなさい。」

天馬

「こうなったらやるしか無い！行くぞみんな！」

天馬の掛け声で、レックス達はカグツチに攻撃を仕掛ける。カグツチは華麗な動きと素早い攻撃で、レックス達を翻弄する。

セイリユウ

「アヤツ、目を閉じとる癖に周りが見えとるのか!？」

『月闇必殺撃！習得一閃！』

つ。
レックスは剣から炎の斬撃を、カリバーは月闇から闇の斬撃をカグツチに向けて放

カグツチ

「ハッ！」

ドカーン！

だがカグツチも青い炎の斬撃を放ち、レックス達の攻撃を弾いた。

レックス

「俺達の攻撃を弾いた!？」

ホムラ

「あの人、強い！」

ニア

「諦めるな！此方は三組だよ！」

ニアとビヤッコが上空からカグツチに襲い掛かる。

バーン！ バーン！

ビヤッコ

「のわっ!？」

ニア

「キャッ!？」

だが突如、カグツチの後ろからネットが発射され、ビヤッコとニアの動きを封じた。

レックス

「ニア！ビヤッコ！」

兵士長

「エーテル遮断ネットだ！大気からのエーテル流を遮断されては、得意のアーツも撃て
まい！」

カグツチ

「ブレイドにも弱点はあります。その一つがこれ、大気中のエーテルの流れを遮られること。」

天馬

「待ってろ！今助ける！」

天馬はニアとビャッコを助けに向かおうとするが、ニアが待ったをかけた。

ニア

「来るな！アンタ達は逃げろ！アタシ達に構うな！」

レックス

「無理言うな！見捨てるなんて出来る訳無いだろ！」

ニア

「レックス、アンタにはアンタの目的があるだろ!?それを果たせ！」

レックス

「でも……………」

ビューーン！

突然、レックス達の頭上を何かが高速で通過した。

ドカーン！バシャーン！

謎の何かはカグツチの真上にある水道管に激突し爆発。破損した水道管から大量の水が溢れ、カグツチに降り注ぐ。

カグツチ

「水!?!」

水を被った影響かカグツチの力が弱まり、周囲を取り囲んでいた炎の壁が消えた。

レックス

「ホムラー!」

ホムラ

「はい!」

レックスとホムラは共に剣を持ち、炎の大検を作り出す。そして巨大な炎の斬撃をカグツチに向けて放った。

レックス・ホムラ

「《バーニングソード》!!」

カグツチ

「っ!!」

ドカーン!

カグツチは防衛体制に入り、バーニングソードを受け止める。

カリバー（クリス）

「今だ!」

『必殺リード! ジャアク忍者!』

カリバーは月闇に、緑の忍者が描かれた緑のワンダラーライドブック《猿飛忍者伝》を翳す。

『月闇必殺撃！習得一閃！』

ドロン！

そして月闇を地面に突き刺し、紫の煙を発生させる。煙が消えると、レックス達は正に隠れ身の術の如く姿を消していた。

兵士長

「逃がすな！追え！」

兵士長は兵士数人に指示を出し、レックス達の後を追わせた。

ニア

「そうだ、それでいい……………」

カグツチ

「この水流の中での技……………天の聖杯、やはり本物か。」

—————

↳路地↳

一方、無事に逃げ出したレックス・ホムラ・天馬・カリバーは路地を走っていた。

「おーいー！」

すると、何処かから少年とおぼしき声がある。声のする方を見ると、そこは壁。

ギギギ……………

と思った次の瞬間、壁に化けてた隠し扉が開き、扉の向こうから1人のノポンの少年

が姿を見せた。

少年ノポン

「こつち！こつちだも！逃がしてあげるも！」

天馬

「えっ？君は……………」

「逃げ！絶対に逃がすな！」

そこへ、レックス達を追う兵士達が近づいてきた。

少年ノポン

「はやく！はやく来るも！」

レックス達は取り敢えず少年ノポンの誘いに乗り、扉の中へ入る。全員が入って直ぐ少年ノポンは隠し扉を閉め、その扉の前を兵士達が通過していった。

カリバー（クリス）

「どうやら、行つたみたいだ。」

安全を確認すると、カリバーはベルトのブックを抜き取り変身を解いた。

レックス

「ありがとう、助かったよ。でも何で俺達を？」

少年ノボン

「何となくも。」

天馬

「何となく？」

少年ノボン

「つて言うのは嘘も。ホント言うと、いつも威張り散らしてる兵士に、完成したばかりのロケットカムカムをお見舞いしてやろうと思つてたも！」

天馬

「ロケット……あ、さつき飛んできたヤツか！」

少年ノボン

「で、丁度そこへ兄ちゃん達が追われて来たんだも。外れて水道管に当たっちゃったけど、結果オーライだも！」

レックス

「そっか、さっきのは君が……………」

少年ノボン

「《トラ》だも。よろしくも！」

レックス

「トラって言うのか。俺はレックス、こっちはホムラ。」

天馬

「俺は天馬、こっちはクリス。」

ホムラ

「よろしくお願いします。」

クリス

「よろしくな。」

トラ

「よろしくも！モッフ……………」

何やら嬉しそうなトラ。

トラ

「実は、助けたのにはもう1つ理由があるんだも。」

レックス・天馬

「理由？」

トラ

「ま、それはトラん家に着いてからゆつくり話すも！こつちだも！」

トラの案内で、レックス達は通路の奥へと向かう。



くスペルビア軍トリゴ基地く

その頃、トリゴの街の外れにあるスペルビア軍の基地に、巨大な巨神獣戦艦が到着した。

ガコン！

巨神獣戦艦は埠頭に固定され、格納庫のハッチが開く。そして1人の軍人がグーラの大地に降り立った。

「……………」

To Be Continued…

第七話

トトラの家

レックス達はトトラに案内され、トトラの自宅へとやって来た。家の中には人が使っても問題無いサイズのテーブルやキッチン、更にロフトまでもが備わっていた。

レックス

「こんなところに家が……」

天馬

「うわあ、ノポンの家って思ってたより広いんだね。」

トトラ

「ここは裏口も。玄関は向こうにちゃんとあるも。」

と、レックスはふと壁の隙間から外を見る。外を見ると、下には雲海が見えた。

レックス

「ウヒャア!?!すぐ下は雲海じゃないか!それも結構高い……………」

トラ

「見晴らし良いも?トラ、そこから雲海を見るの大好きなんだも!」

ホムラ

「素敵なお家ですね。」

クリス

「ああ、同感だ。」

トラ

「……………ところで、レックスのアニキと天馬のアニキ。」

レックス・天馬

「あ、アニキ?」

突然、トラは2人をアニキと呼んだ。

トラ

「助けたもう1つの理由なんだけど……………トラ、実はドライバーと仲良くなりたかつ

「たんだも。」

クリス

「ドライバーに興味があるのか？」

トラ

「当然だも！ブレイドと一心団体になって、すんごい力を使えるドライバーは凄いだも！アニキ達の、オトモになりたいんだも！」

レックス

「え〜つと……ねえトラ、その『アニキ』って呼び方、何とかならない？」

トラ

「もも？…どうしても？」

レックス

「いや、俺も天馬もまだドライバー成り立ての新米ドライバーだからさ、アニキっていうのはちよつと違うかな……」

トラ

「そんな事無いも！新米でもドライバーはドライバーだも！偉いんだも！威張り散らすも！」

どうやらトラの意思は硬い様だ。

天馬

「威張り散らすのはどうかと思うけど……分かった、アニキって呼びたいなら俺は止めないよ。」

レックス

「俺も。でもさ、オトモじゃなくて、友達になろうぜ？」

トラ

「ホントかも!?トラ、アニキ達のお友達になるも！やったも！」

レックス達と友達になれて、トラは大いに喜んだ。

レックス

「何だか変わったヤツだな？」

天馬

「でも、俺には分かるよ。トラの真っ直ぐな気持ちは、本物だって。」

大喜びするトラを見て、レックス達は微笑んだ。

レックス

「そうだとら、この街の事って詳しい？軍に捕まった人が何処に連れて行かれるのか、知りたいんだ。」

ホムラ

「レックス、もしかしてニア達を？」

レックス

「ああ、ニアとビヤッコを助けないと！」

セイリユウ

「やはりそう来たか……………」

セイリユウはレックスの考えてる事はお見通しの様だ。

トラ

「それって、アニキ達と一緒に居たドライバーとブレイドも？」

天馬

「うん、俺達を助けてくれたんだ。」

トラ

「もも…………それは街で色々情報を手に入れないと分からないも……………」

グウウウウ…………ギョルルル…………

突然、天馬とレックスの腹の虫が物凄い唸り声を上げた。

天馬

「取り敢えず…………何か食べない？」

クリス

「だな、腹が減っては戦は出来ぬとも言おう。」

トラ

「賛成だも！運動した後は、ご飯食べないと考え纏まらないも！」

レックス

「ご飯はいいよ。今はニアとビヤッコの居場所を（グウウウウ…………ギョルルル…………）」

どうやらレックスの腹の虫は正直の様だ。

レックス

「そう言えば、ウズシオを降りてから何も食べてないっけ……………」

ホムラ

「あの、良かったら私が何か作りましょうか？」

レックス

「ホムラ、料理出来るの？」

ホムラ

「はい！煮もの焼きもの揚げもの蒸しもの、火を使った料理なら何でもござれです！」

そう言うと、ホムラは手の平に炎を出現させる。

クリス

「おお、流石は炎のブレイド！」

ホムラ

「ただ、かき氷とかは少し苦手かも……………」
レックス

「まあ、そうだよね……………」

こうして、一同は食事をとることにした。ホムラは早速台所に立ち、トラの家にある食材と調理器具を拝借し調理を始める。

天馬

「ホムラの料理かあ、どんなのが来るのかな？」

クリス

「楽しみだな。」

そして数分後、料理が完成した。

ホムラ

「御待たせしました！とろピカイモを使った、特製《とろピカカチャータ》です！」

レックス達は全員で頂きますをし、食事を始めた。

天馬

「美味しい！」

クリス

「これは……………」

レックス

「美味しい……………美味しいよホムラ！」

トラ

「ウマウマだも〜！ほっぺ落っこっちゃうも〜！」

セイリユウ

「これは美味しい！こんな美味しいモンを食ったのは、120年ぶりじゃ！」

ホムラの料理はレックス達に大好評。ホムラも自身の手料理を喜んでもらい、嬉しかった。

ホムラ

「久しぶりの料理でしたから、腕が鈍ってたらどうしようって思ってたんです。」
レックス

「鈍るところか、最高だよホムラ！」

レックスに褒められ、ホムラは微笑んだ。

トラ

「…………でも不思議だも。ホムラちゃん火を使うブレイドも？なのにトラが水道管ブツ壊した時も、火の力使えてたも。」

クリス

「そう言えばそうだな。あのカグツチとか言う帝国のブレイド、ヤツもホムラと同じ火属性のブレイドだったが、あっちは水を被ってパワーダウンしていたな…………」

レックス

「それって珍しいこと？」

トラ

「この世界には、《エーテル》っていう属性の力があるも。火とか水とか風とか、色々あるも。ドライバーもブレイドも、エーテルの力で戦うも。で、当然火は水に弱いも。だ

からあのブレイドのねーちゃんは、水をバシャーンってなってパワーダウンしたも。」

レックス

「でも俺とホムラの力は問題なく発揮できたぞ？」

セイリユウ

「全く、衰える事無くな……………」

レックス達は一齐にホムラに目を向ける。

ホムラ

「えーつと……………実は私の属性、火じゃないんです。」

トラ

「ももも!?!火じゃないのに、どうして火の力使えるも!?!」

ホムラ

「えーつと、それには結構複雑な事情が……………」

トラに質問され、ホムラは困りモジモジする。

クリス

「止めておけトラ。ホムラが困ってるだろ？」

レックス

「誰にも人には言えない事情つてのがあんの。俺にもあるし、トラにだつてあるだろ？」

トラ

「もー……………」

クリスとレックスがホムラをフォローし、トラは諦めた。

ホムラ

「ごめんなさい……………いつかお話出来る時が来れば必ず。」

レックス

「良いって、そんなこと。」

と、ここで天馬がクリスにある事を聞いた。

天馬

「……………そう言えばクリス、君の属性は何？」

クリス

「俺か？俺の属性は闇だ。恐らく暗黒剣月闇をアーツにしたからだろう。」

トラ

「となると、クリスの弱点は光属性も。」

クリス

「確かにそうだ。だがコイツの場合は、少し特殊だね。」

そう言ってクリスは月闇をテーブルの上に置く。

クリス

「暗黒剣月闇の刃には、光に向かうほど切れ味を増す性質がある。光が強ければ強いほど、影が濃くなるのと同じようにな。」

ホムラ

「クリスさんにとって、光は弱点でもありウィークポイントでもあるって事ですね。」

天馬

「へえ、不思議だなあ聖剣って。」

それから少しして、一同は食事を終えニアとビヤッコ救出の為、作戦会議を開いた。

レックス

「さてと、まずは街に出て情報を集めないといけないね。」

天馬

「でも、迂闊に外に出るのは危ないよ。ひよつとしたら俺達、御尋ね者になってるかも知れないし……………」

クリス

「なら情報収集は俺に任せてくれ。俺に1つ考えがある。」

天馬

「分かった、頼むねクリス。」

ホムラ

「後は街の地図が必要ですね。出来るだけ正確な地図が。」

トラ

「それなら、トラん家の倉庫にあった筈も！と言つても、何処に仕舞ったかは覚えてないも……………」

レックス

「よし、じゃあクリスは情報収集。俺達は倉庫で地図探した。」



くスペルビア軍トリゴ基地 正門前く

翌日、スペルビア軍トリゴ基地の正門付近にはカリバーが居た。

カリバー（クリス）

「さて、始めるか。」

カリバーは近くの農家小屋の影に隠れ、月闇に猿飛忍者伝ブックを翳す。

『必殺リード！ジャアク忍者！』

続けて、3匹の子ブタが描かれた黄緑色のワンダーライドブック《子ブタ三兄弟》を

翳す。

『必殺リード！ジャアクブタさん！』

そしてトリガーを引き、3体の黒いブタ忍者を召喚した。

『月闇必殺撃！習得二閃！』

カリバー（クリス）

「頼んだぞ。」

3体のブタ忍者は素早く基地内に侵入し、兵士達の会話を盗み聞き、軍に関する資料集め、ニアとビヤッコの現在地の把握を行った。そして数十分後、ブタ忍者達はカリバーの下へ戻り、カリバーはブタ忍者達が得た情報を持ってトラの家に戻った。

くトラの家く

トラの家に戻ったクリスは、ブタ忍者達が得た情報をレックス達に話した。テーブルの上には、トリゴの街の地図が置いてある。

レックス・ホムラ・天馬

「処刑!?!」

クリス

「兵士達がそう話しているのを聞いたらしい。」

そう言うところクリスはテーブルの上に、ブタ忍者達が入手した巨神獣戦艦の図面を広げ、地図に巨神獣戦艦の現在位置を示す赤い楕円を描く。

クリス

「ニアとビヤッコは今、軍港に停泊中の巨神獣戦艦の収容区画に囚われている。予定では処刑は三日後だそうだ。」

セイリユウ

「巨神獣戦艦の中とは、また厄介じゃのう……どうやって助け出したモンか……」
トラ

「軍港は警戒厳重、正面から入るのは先ず無理も……」

悩む一同。すると、ホムラが地図を見て何かを見つけた。

ホムラ

「……………これ、大樹の根つこですよ？この図が正確なら、岸壁から伸びた根が船底まで続いているみたいです。」

クリス

「図面によれば、その根の近くには船底の物資搬入口がある。」

トラ

「そこなら警備も手薄だも！オマケに、夜は物資の搬入はやってないも！」

セイリユウ

「うむ、それしか無さそうじゃの。」

レックス

「でも大丈夫かな？もしまたあのブレイドと鉢合わせになったら……………」

トラ

「もっふっふ………」

突然、何やら不気味な笑い方をするトラ。

天馬

「トラ、どうしたの？」

トラ

「みんなに見せたいモノがあるも………」

そう言うと、トラはレックス達をカーテンで仕切られた部屋の前に連れていった。トラがカーテンを開けると、そこには赤いマントと白い帽子、そして左胸に白い花飾りをした、全身メタリックボディの少女が居た。だが少女は眠っているのか、瞳を閉じて起きている気配は無い。

天馬

「これは……?!？」

トラ

「誰にも見せた事の無い、トラだけの秘密……………《人工ブレイド》なんでも!!」

ホムラ・レックス

「人工ブレイド?」

トラ

「トラはずっとドライバーに憧れてて、1年前にドライバースカウトに志願したんだも。

でも……………」

レックス

「ダメだったの?」

トラ

「うん、トラにはドライバーの適正が無かったんだも……………でもこの人工ブレイドが完成すれば、適正が無いトラでもドライバーになれるも!」

クリス

「……………なるほど、体内に組み込まれた《エーテル炉》によって、自らエーテルを発生させ動力としているのか……………実に画期的な発明だ!素晴らしいぞ!」

と、クリスは近くの作業台に置いてあった人工ブレイドの設計図を見て、感動してい

た。

セイリユウ

「しかし見事なもんじゃ！トラ、お主が一から作ったのか？」

トラ

「作り始めたのはジイちゃんとお父ちゃんだも。でもジイちゃんは死んじゃって、お父ちゃんもどつかへ行っちゃったも……だからトラはコイツを完成させて、ドライバーになつて大活躍するも！そうすればお父ちゃんも噂を聞き付けて、帰ってきてくれる筈も！」

ホムラ

「トラ君……」

クリス

「………ところでトラ、この人工ブレイド、見たところほとんど完成している様だが？」

トラ

「もつつぶつぶ、後は足りないパーツを買ってくれば良いも！でも……」

突然、先程まで満ちていたトラの元気が無くなった。

トラ

「トラ、お金全然持つて無いんだも………」

トラの突然のカミングアウトに、レックス達は驚いた。

レックス

「全然無いって、1ゴールドも!？」

トラ

「すっからかんも………」

天馬

「………つまりは、お金を貸して欲しいと？」

トラ

「貸すんじゃないくて………出してくれたら、もっと嬉しいも?。」

トラの返答に呆れるレックスだったが、素直なだけ少しマシであった。

セイリユウ

「流石はノボン族。シツカリと言うかチャツカリと言うか……………」

クリス

「だがこの人工ブレイドが完成すれば、とてつもない戦力になるだろう。外部からエーテルを取り込む必要が無いから、エーテルを遮断するトラップも無力化出来る筈だ。」

レックス

「確かにそうだけど……………ちなみに、いくら要るの?」

トラ

「大体6万ゴールドくらいも。」

レックス

「ろくまん!？」

トラの言った金額に、レックスは仰天した。

レックス

「流石に6万は……………」

セイリユウ

「何じゃ？前の仕事で10万くらい貰ったのでは無かったのか？」

レックス

「装備を揃えた後、全部仕送りに出しちゃったんだ……ああ、こうなるなら少しくらいへソクリしときゃ良かった!!」

後悔するレックス。

天馬

「じゃあ、パーツ代は俺が出すよ。レックスが俺の分の装備も揃えてくれたから全額手元にあるし、一宿一飯の恩もあるしね。」

トラ

「えっ!?!良いのかも!?!天馬のアニキ!」

セイリユウ

「何と太っ腹!」

天馬

「クリスの言う通り、この人工ブレイドが完成すれば大きな戦力になってくれる。それに俺の師匠が言ってた。本気でやる気になってる奴は、ここ一番で頼りになるって。」

レックス

「うーん、何も出来ないってのも癪だな………トラ、必要なパーツのリストとかあるか？」

トラ

「あるもー！」

トラはレックスにパーツリストを見せた。

レックス

「あ、これなら幾つかサルベージで手に入るかも知れない！」

トラ

「ホントかも!？」

天馬

「じゃあ、レックスはサルベージでパーツを集めて。俺は街で残りのパーツを買ってくるから。」

レックス

「分かった。早く人工ブレイドを完成させて、ニアとビヤッコを助けに行こう！」

トラ

「オトモするも、アニキ！」

ホムラ

「応援してますね、2人とも。」

それから2日後、トリゴの空に雷雲が立ち込める夜、レックスと天馬が頑張ったお陰で、人工ブレイドに必要な全てのパーツが揃った。

カチャカチャ、カチャカチャ……………

トラが慎重に、最後のパーツを人工ブレイドに組み込む。

トラ

「……………よし、終わったも！」

レックス

「完成したのか？」

トラ

「もちろんも！後はエネルギーチャージして、起動すれば良いも！」

セイリユウ

「うむ、ニア達が処刑されてしまうまで時間が無い！始めるのじゃ、トラよ！」

トラ

「分かったも！」

トラは起動レバーに手……………ではなく耳をかける。

トラ

「人工ブレイド、お前が目覚める時が……………！」

ホムラ

「ダメよトラ君！」

突然、ホムラがトラを呼び止めた。

トラ

「な、何でも？」

ホムラ

「だって、人工ブレイドなんて呼んでたら可哀想でしょ？ちゃんと名前を付けてあげて。トラ君が考えた名前を。」

トラ

「そ、そうかも……いや実は、もう考えてあるも。コイツの名前……」

クリス

「だったら、迷う必要も無いな。」

天馬

「さあトラ、頼んだよ！」

トラ

「わ、分かったも！」

……
……
……
トラは再び右耳で起動レバーを強く握り、深呼吸をして神経を全集中させる。そして

トラ

「さあ、目覚めろも……トラだけの人工ブレイド、ハナ!!」

ガツシヤン!

ゴロゴロゴロ……ドーン!!

レバーを押した途端、グーラの風車に巨大な雷が落ちた。雷の電気は揺れと停電を伴いながらトラの家中を駆け抜け、ハナのボディへと注がれる。

天馬

「な、何だ!？」

クリス

「落雷か？」

ウイイイイ……

揺れが止み、家中の電気が復旧。ハナのボディのエーテル回路がオレンジに発光し、内部回路が唸り声を上げる。

レックス・天馬・ホムラ・クリス・セイリユウ

「……………」

トラ

「は、ハナ……………」

レックス達は固唾を飲んで見守る。

ピコーン！

ハナ

「おはようございませす！主人様！」

レックス・天馬・ホムラ・クリス・セイリユウ

(えっ……………?)

だが目覚めたハナのハイテンションっぷりに、レックス達は状況が飲み込めずポカー

ンとなる。

トラ

「ちよ、ちよつと待ったも!!設定間違えたも!!」

トラは大慌てでハナをシャットダウンし、セッティングをし直す。

トラ

「で、では気を取り直して……………スイッチオンだも!!」

ガツシヤン!

ゴロゴロゴロ……………ドーン!!

再びレバーを押し、グーラの風車に巨大な雷が落ちる。雷の電気は再びハナのボディへと注がれ、そして遂に……………ハナが動き出した。

ハナ

「おはようございますも、ご主人。」

トラ

「せ、成功だもー!!これがトラの自信作、世界初の人エブレイド《ハナ》だも！」

天馬・レックス・クリス

「おおおっ!!」

ホムラ

「凄い!!」

セイリユウ

「こりやタマゲタわい!!」

ハナの起動は無事成功し、トラは大喜び。レックス達は感心した。

トラ

「どうだも?トラ凄いも!？」

レックス

「ああ、マジで凄いよ!いやでも、さっきのはビックリしたなあ。てつきりそういう趣味

なのかと……………」

ビクッ

レックスの言葉に、トラはビクッとした。

トラ

「と、トラにそんな趣味は無いも！アレは……………そう！センゾージイちゃんの趣味も！」

ホムラ

「ホントウですかあ〜？」

ホムラがジト目でトラを見たとすると、ある一点に目を向ける。

トラ

「ももっ!?!」

ホムラの目線の先には、落雷の揺れで開いたクローゼット。そしてクローゼットの中

にはメイド服やドレス、修道服と言った女性モノの衣装がギツシリ詰まっていた。

レックス

「え〜つと……………トラ……………?」

トラ

「あいやその、これは……………」

レックスにもジト目を向かれ、トラは大量の冷や汗を流す。

レックス

「……………プククク、ハハハハハッ!!」

だが次の瞬間、レックスは腹を抱えて大爆笑。それに釣られて、ハナ以外全員大爆笑となった。

レックス

「さあ、早くニア達を助けに行こう!」

ホムラ

「はい！」

セイリユウ

「うむ！」

天馬

「ああ！」

クリス

「了解だ！」

トラ

「ももっ！」

一頻り笑った後、一行はニアとビヤッコ救出に向かため出発した。

ハナ

「と言うわけで、ハナですも。今後とも、よろしくなのですも。」

律儀に挨拶を済ませ、ハナも後に続いた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
:

第八話

く グーラの街 クーラム農場く

新たにトラとハナが仲間となったレックス達一行は、スペルビア軍基地の近くにある《クーラム農場》にやって来た。

トラ

「アレが、巨神獣戦艦も！」

一行の目線の先には、軍港に停泊中の巨神獣戦艦が居た。

天馬

「デカイなあ……………」

セイリユウ

「立派な巨神獣じゃのう……………これもインヴェディアとの再戦に向けた、帝国の準備の

「一つと言うわけか……」

レックス

「見てあそこ、ホムラとクリスの言った通り、根が搬入口の下まで伸びてる。」

レックスは巨神獣戦艦の船底を指差す。

クリス

「この下からなら回れそうだ……どうする？」

レックス

「もちろん、行こう！」

一行は壁に作られた民家の屋根や蔦の梯子を足掛かりにし、船底の根まで移動。搬入口の真下に到着した。

『ジャックと豆の木！フムフム……』

天馬はクリスから、巨大な豆の木を登る少年が描かれた緑のワンダーライドブック

《ジャツ君と土豆の木》を受け取り、ブックを月神の剣先に翳す。

『習得一閃!』

そして剣を大樹の根に突き刺し、刺した部分から搬入口まで続く巨大な豆の木を出現させた。



く 巨神獣戦艦 バラスト搬入口く

一行は豆の木を登り、巨神獣戦艦内部に侵入した。クリスが図面を見て、現在地とニア達が囚われていると思われる収容区画の場所を確認する。

クリス

「図面によれば、すぐ上のフロアに独房がある。先ずはそこから当たってみよう。」
レックス

「分かった！」

一行は艦内を巡回するスペルビアの兵士達に気付かれぬ様、慎重に移動する。そして無事、最初の独房がある《第一独房区画》に到着した。

ハナ

「ご主人、この辺りにブレイドが居ますも。」

トラ

「ハナ、そんな事が分かるのかも？」

ハナ

「はい、何かブレイドの波動って感じでも。」

レックス

「よく分かんないけど、ビヤッコが居るのかな？」

天馬

「よし、片っ端から開けてみよう。囚人が収容されてるなら鍵がかけてある筈だ。」

レックス達は片っ端から独房の扉を開ける。すると……………

ホムラ

「レックス！この扉、鍵が掛かってます！」

ホムラが鍵の掛かった独房を見つけた。

セイリユウ

「見つけたは良いが、どうやって開ける？」

レックス

「クリス、鍵開けが出来る本と違って無い？」

クリス

「流石にそんな都合の良い本は持っていない……………」

ホムラ

「此処は私にお任せを。」

ホムラは静かに両手を前に出し、独房の扉に向けて炎を放つ。

ドカーン！

だが勢いが強すぎたのか、炎はあっという間に扉を突き破り独房の中へ……………

天馬

「うわぁ……………」

クリス

「これは、何と言う威力……………」

レックス

「ホムラ、火が強すぎだよ……………」

ホムラ

「ごめんなさい！加減が難しく……………あのう、火傷とかしてませんか？」

「ホムラ様！レックス様！」

独房の中にはホムラの炎を避けたのか、うつ伏せのピヤッコが居た。

天馬・レックス

「ビヤッコ！」

ビヤッコ

「おお、天馬様にクリスマス様まで！」

セイリユウ

「おお、無事じゃったかビヤッコ！」

ヒョコ

トラ

「良かったも！」

ハナ

「ほらご主人、やっぱり此処に居たですも！」

レックス達の前に、トラとハナがヒョコつと現れる。

ビヤッコ

「巨神獣様と……えっと、どちら様ですか？」

レックス達はビヤッコを独房から出し、ビヤッコにトラとハナについて説明した。

ビヤッコ

「そういう事でしたか……トラ様、ハナさん、ありがとうございます。」

ビヤッコはトラとハナに頭を下げ、礼を言った。

レックス

「ビヤッコ、いきなりで悪いけどニアの居場所分かる？」

ビヤッコ

「もちろんです、私と同調した唯一の御方ですから。」

ビヤッコは気を集中させ、ニアの居場所を探る。

ビヤッコ

「見つけました！お嬢様は、この上のフロアにて囚われております。」

クリス

「図面によれば、上のフロアに別の独房区画がある。恐らくニアはそこだ。」

レックス

「助けに行こう！処刑なんかさせる訳にはいかない！」

—————

↳ 第二独房区画↳

レックス達はクリスの図面とビヤツコの感知能力を便りに、第二独房区画にやって来た。

ビヤツコ

「間違いありません、あそこです！」

ビヤツコが示す独房は、2人の兵士によって守られている。

クリス

「天馬、コレを使え。」

天馬

「分かった。」

クリスは天馬に、お菓子の家とそれに向かう小さな兄妹が描かれたピンク色のワンダーライドブック《ヘンゼルナッツとグレーテル》を渡し、天馬は月神の剣先にブックを翳す。

『ヘンゼルとグレーテル！フムフム………習得一閃！』

そしてトリガーを引いて剣先を床に突き刺し、床中に大量の飴玉を発生させる。

兵士A

「な、何だコレは!?!」

兵士B

「あわわわわわわわ!!」

ズテーション!

独房を見張る兵士は飴玉で足を滑らせスツ転ぶ。

ハナ

「行くですよ! 《ハナ・ジャンピングプレス》!!」

ドーン!

そしてハナが両足に搭載されたジェットエンジンでジャンプし、兵士2人に強烈なボディ・プレスを叩き込んだ。兵士2人はボディ・プレスを食らって直ぐ気絶した。

トラ

「ワン・ツー・スリー! 勝者ハナだも!」

トラはスリーカウントで兵士が気絶している事を確認。レックスは兵士から独房の鍵を奪い、ニアが閉じ込められていると思われる独房の扉を開けた。

レックス

「ニアー！」

扉の向こうには、独房の真ん中で座り込むニアの姿があつた。

ニア

「レックス、アンタ……………！」

ニアはレックスが助けに来た事に驚いた。

ビヤッコ

「遅くなつてしまい、申し訳ありませんでした……………」

ビヤッコはニアに、助けが遅くなつてしまった事を謝罪した。

ニア

「いいんだ、誰も来てくれる訳ないって思ってたから……」

レックス

「そんな訳無いだろ？助けられたら助け返せ、サルベージャーの合言葉その2だ！」

レックスはそう言つて、ニアに手を差し出す。ニアは静かに笑い、レックスの手を握り立ち上がった。

ニア

「全く、アンタらしいね。」

セイリユウ

「さあ、此処に長居は無用じゃ！脱出するぞ！」

レックス達は独房の外に出る。そして、ニアはトラとハナに気付いた。

ニア

「あれ？ノポン族？」

レックス

「紹介するよ、彼はトラ。そっちはトラが作った人工ブレイドのハナ。俺達の新しい仲間さー！」

トラ

「よろしくもー！」

ハナ

「よろしくお願いしますもー！」

ニア

「よ、よろしく……アタシはニアだよ。」

く格納庫く

ニアと合流した一行は、脱出のため格納庫のハッチへ向かっていた。

トラ

「アニキ、あとちよつとだも！」

ガコン

だが突然ハッチが開き、ブレイドを連れた明らかに偉そうな態度の男が現れた。

男

「そうは行きませんよ！イーラのテロリストを捕えたという実績が、取り逃がした汚点になってしまふのは困るの。」

男は足を止め、まるでお宝を見るような目でホムラを見る。

男

「翠玉色のコアクリスタル、お前は天の聖杯！忌々しいけど、メレフの読み通りだったって訳ね。」

クリス

「貴様は何者だ？正面から堂々と登場とは、軍の人間と言う事か？」

男

「ええそう、私はスperlビア帝国グーラ領の領事、名を《モーフ》と申します。」

レックス

「お前もホムラを狙っているのか？」

モーフ

「お前も？当たり前でしょ？天の聖杯、その力は空を裂き大地を割る、アルスト史上最強のブレイド。聖杯を求めない者は、その価値を知らない愚者のみ。そして私は愚者ではない。だから私は聖杯を手に入れる。これぞ完璧な三段論法よ！」

ハナ

「最後は論理が飛躍してますも……………」

ビヤツコ

「同感です……………」

静かに冷たいコメントを挟むハナとビヤツコ。

ニア

「おあいにく様。悪いけどアタシもホムラも、アンタの手柄になんかならないよ！」

モーフ

「テロリストの分際で生意気ね……………」

『Get go! under conquer! than get keen! ジャア
クドラゴン!』

カリバー（クリス）

「言っておくが、俺達はテロリストじゃないぞ！」

『月神必殺撃!』

ドローン!

クリスはカリバーに変身し、猿飛忍者伝ブックを使いレックス達をその場から消す。

モーフ

「消えた!？」

「こっちだよ!」

次の瞬間、ニアとビヤッコがモーフの背後から襲いかかる。

ガキン!

だが、モーフのブレイドがニアとビヤッコの攻撃を防いだ。

トラ

「行くも、ハナ!」

トラはハナに自身のアーツである盾を預け、盾の正面中央にドリルを展開し、モーフに向かってジェット噴射で突撃する。

ハナ

「《ハナ・ドリル》！」

ガンツ！

だが又してもモーフのブレイドが防ぐ。

『読後一閃！』

ドカーン！

更に別方向からレックス・天馬・カリバーが斬撃を放つが、又してもモーフのブレイドが攻撃を受け止めた。

天馬

「あいつ、ブレイドを楯にする様な戦い方を……………！」

モーフ

「はあく何を言ってるの？ブレイドはいくら傷付いても再生する。けれどドライバーが

死ねば、元のコアに戻ってしまおうでしょ？」

レックス

「だからブレイドが楯になるのは当然だって言うのか？」

ニア

「アンタマジで最低だね！身体の傷は修復出来ても、心の傷はなかなか癒えないんだよ？」

モーフ

「あらやだ、私にはブレイドの気持ちがかかるとでも？お優しいドライバーさんも居たもんね！」

モーフの口調に無性に腹が立つ一行。

レックス

「頭来た！アイツは絶対にぶつ倒す！」

カリバー（クリス）

「同感だ。なら先ず奴のブレイドの動きを封じる必要があるな。少し手荒に行くが、勘弁してくれよ！」

カリバーはベルトからジャアクドラゴンブックを引き抜き、月闇に翳す。

『必殺リード！ジャアクドラゴン！』

そしてトリガーを引き、月闇から紫色の煙を出現させモーフのブレイドに放つ。

『月闇必殺撃！』

煙はモーフのブレイドに吸収され、次の瞬間モーフのブレイドはピクリとも動かなくなつた。

モーフ

「あら？ねえ、どうしちゃったのよ!?!すっかりしなさい!!」

レックス・ニア

「ブレイドの痛み、思い知れ!!」

その隙にレックス達は一齐にモーフへ襲いかかる。

モーフ

「ひいひい！お止めなさい、助けて、誰か〜!!」

そして数分後、レックス達の前には顔中瘤と痣だらけのモーフがフラフラと立っていた。

モーフ

「何故、こんな子供達に……………天の聖杯を手に入れて、本国へ……………凱旋……………」

モーフは力尽き、気を失い倒れた。モーフのブレイドもそれに乗じてか、倒れて眠りについた。

セイリユウ

「気を失った様じゃのう。」

レックス

「ニアを処刑しようとするからだ！」

ニア

「違う、コイツらはアタシを本国へ送ろうとしてた………レックス、罠だよコレは！」

レックス

「えっ?じゃあ、ニアが処刑されるって触は嘘!?!」

トラ

「アニキ、そんなことどうでも良いも!早く追手が来る前に逃げるも!」

セイリユウ

「そうじゃな、急いで街の外に逃げるんじゃ!」

レックス達は急いで巨神獣戦艦から脱出し、スペルビア軍グーラ基地正門へと急ぐ。

ポオオオオオオオ!!

だがあと少しというところで、青い炎の壁が出口を塞いだ。

天馬

「この炎は……………!」

カリバー（クリス）

「アイツか!」

一行の予想通り、炎の壁の向こうからカグツチが。

???

「やはり、モーフ君では抑えられなかったか……………」

そしてそのドライバーとおぼしき、カグツチの剣を持つ軍人が現れた。軍人は一見すると男に見えるが、よく見ると顔付きや体格は女性であった。

天馬

「お前は誰だ?」

???

「私はスペルビア帝国特別執権官、《メレフ・ラハット》。」

ビヤッコ

「特別執権官メレフ……：《炎の輝公子》の異名を持つ帝国最強の女ドライバー。そして帝国最強のブレイド、カグツチの使い手。」

レックス

「最強×最強でチョー最強って訳か？」

ホムラ

「どうやら、待ち伏せされたみたいですね。」

ニア

「アンタでしょ？アタシが処刑されるって嘘の情報を、レックス達の耳に入れる様に加工したのは！」

メレフ

「良い勘をしているな。そう、君は君で利用価値がある。しかし……」

ニア

「レックス達は、もっと利用価値があるって？」

メレフ

「少し違うな。」

メレフは静かに、ホムラに目を向ける。

メレフ

「翠玉色のコアクリスタルは天の聖杯の証。そのブレイドが真に天の聖杯であるのなら、私にはやるべき事がある。」

ニア

「やるべき事？」

メレフ

「空を裂き大地を割るその力……二度と世界を灼かせる訳にはいかん。」

カリバー（クリス）

「ホムラが世界を灼いただと？ どういう事だ？」

メレフ

「知らないのか？ 500年前の聖杯大戦、3つの巨神獣を雲海深くへと沈めた伝説の力、それが天の聖杯だ。」

レックス

「巨神獣を、3つも!？」

メレフ

「全て歴史が語る真実だ。」

メレフの話の聞き、レックス達は驚愕した。レックスはホムラに問おうとするが、ホムラは俯き黙り込む。

カリバー（クリス）

「なるほど、そういう事か。お前達はホムラを……天の聖杯の力を戦争に利用するつもりだな？ 巨神獣を沈めるほどの力が本当なら、軍が欲しがらない筈がない。」

メレフ

「その様な力を野放しに出来ない、と言っている。」

カリバー（クリス）

「ならば予め聞こう。今の天の聖杯のドライバーはレックスだ。仮にレックスがお前達に従わなければ、どうするつもりだ？」

メレフ

「無論、君達を力づくで拘束するのみ。」

メレフはそう言い、剣を構える。

カリバー（クリス）

「だそうだレックス。どうする？」

レックス

「だったら、全力で言ってみようよ。」

レックス達は武器を構え、臨戦態勢に入る。

レックス

「ゼーツタイに、イ・ヤ・だ!!!」

メレフ

「ならばその意志、等しく力で見せてみる!!」

メレフとカグツチは駆け出し、レックス達に襲い掛かる。

『月闇必殺撃!』

ドローン!

カリバーはモーフ戦同様、猿飛忍者伝ブツクを使いレックス達を消す。メレフとカグツチは足を止め、辺りを見回す。

ニア

「行くよ!」

ビヤツコ

「承知!」

ニアとビヤツコが建物の影から現れ、背後からメレフに襲い掛かる。

カグツチ

「メレフ様!」

メレフ

「……………!」

だがカグツチが気づき、メレフとカグツチは紙一重で回避。そしてニアと刃を交え

る。

メレフ

「ハッ！」

メレフは刀身を幾つも分裂させ、鞭の様に振り回しニアとビヤツコを振り払う。ニアとビヤツコは建物に激突し背中を強打した。

ハナ

「《ノポニツク・ストーム》ですも！」

別方向からハナが盾を向け、体内で生成したエーテルを竜巻状にして放つ。

メレフ

「カグツチ！」

カグツチ

「承知！《陽炎》！」

メレフはカグツチに剣を預け、カグツチは剣を持って回転し、ノポニツク・ストームを打ち消した。

カグツチ

「《燐火》！」

更に青い焰を放ち、トラとハナを攻撃。トラはハナから盾を受け取り、カグツチの攻撃を防いだ。

『キングオブアーサー！』

その隙にカリバーと天馬がメレフに迫る。カリバーは新たに、表紙に1本の大剣が描かれた水色のワンダラーライドブック《キングオブアーサー》を手に取り、表紙を開く。

『とある騎士王が振り下ろす、勸善懲悪の一太刀…』

『ジャアクリード！ジャアクアーサー！』

カリバーはキングオブアーサーブックを月闇に翳しベルトにセット。そして月闇の柄の先でベルト上部のボタンを押し込みブックを展開。展開したページには、大剣を持つ水色の左腕が描かれていた。

『闇黒剣月闇！Get go！under conquer！than get ken！ジャアクドラゴン！』

カリバーは左腕に水色の鎧を装着し、左手に新たな大剣《キングエクスカリバー》を装備。

天馬・カリバー

「はあああああああああ!!」

天馬とカリバーはメレフと刃を交え、激しく火花を散らす。

メレフ

「ソイツが君のブレイドか？なるほど、カグツチの言う通り面白い力だ。だが！」

ジャキーン！

メレフは剣を力一杯振るい、炎の刃で天馬とカリバーを吹き飛ばす。カリバーは吹き飛ばされた衝撃でベルトのブックが外れ、左腕の鎧と大剣が消滅してしまった。

レックス

「うおおおおおおお!!」

続いてレックスとホムラが接近し、メレフと激しく刃を交える。

メレフ

「どうした？君の意志はその程度のモノか!？」

だがメレフの圧倒的な力に押され、レックスとホムラは防戦を強いられる。

ジャキーン！

レックス

「ぬああああー！」

ホムラ

「ああああー！」

メレフの剣がレックスの右腕を切り裂き、同時にホムラの右腕に激痛が走った。

メレフ

「天の聖杯と言えど、ドライバーがその程度ではな！」

メレフは剣を振るい、炎の斬撃をレックスに向けて放つ。レックスは剣でガードするが、爆風で吹き飛ばされてしまう。

ニア・トラ・天馬

「うおおおおおおお！」

カリバー・ビヤッコ・ハナ

「はあああああああ！」

その直後、レックス達の背後から天馬達が現れ、一斉にメレフへ襲いかかる。

カグツチ

「《陽炎》！」

ドカーン！

だがカグツチの圧倒的な力に及ばず、吹き飛ばされてしまった。

ニア

「つ、強い……………」

レックス

「まだまだ、ホムラは渡さない……………聖杯とか力とか、ホムラをモノ扱いしてるお前なんか

に！」

レックスは腕の痛みを耐えながら、ゆっくりと立ち上がる。

天馬

「ホムラには……ホムラとレックスには、行かなきゃいけない場所があるんだ！それを邪魔させる訳にはいかない！」

天馬はゆっくりと立ち上がり、足下に落ちていたキングオブアースербックを拾い、レックスの前に立つ。

メレフ

「無駄な足掻きを……お前達では私には勝てぬ。それが何故分からぬか？」

天馬

「俺の師匠は言った。勝利の女神がどつちに微笑むか、最後までわからない。勝利を強く信じる者に勝利の女神は微笑むんだって……だから俺は、絶対に諦めない！お前を倒して、レックスとホムラを楽園に連れていくんだ！」

天馬は月神をメレフに向け、大声で叫ぶ。

メレフ

「……………っ!？」

この時、メレフは感じた。天馬から伝わってくる、自分に勝るとも劣らない気迫を。

キイイイイン!

突然、月神とキングオブアーサーブツクが強く光りだした。

天馬

「何だ？」

月神は空に向けて光を放ち、光は雲を消し去り、夜空に満月を出現させる。

キイイイーン!

月から光が放たれ、光は天馬を優しく照らす。すると、キングオブアーサーブックは光輝く聖剣を構えし騎士王が描かれた白いワンダーライドブック《レジエンドオブアーサー》に変化。更に天馬の身体から1つの炎の球が現れ、炎の球は銀河を駆ける白いペガサスが描かれた白いワンダーライドブック《シャイニングペガサス》に姿を変えた。

メレフ

「何だ、今のは?」

ニア

「天馬の身体から、新しいブックが……?」

天馬は徐に、シャイニングペガサスブックの表紙を開く。

『かつて純白の翼を持つ美しい神獣が、黄金の鬣を靡かせ舞い降りた…』

天馬

「……………幻想劍月神、俺に力を貸してくれ！」

天馬は幻想劍月神を腰のベルトに納刀し、ベルトに設けられた3つのスロットの一番右側に、シャイニングペガサスブックをセット。

ドシーン！

ベルトから待機音らしきメロディが流れ、天馬の背後に巨大なシャイニングペガサスブックが出現。

シャキン！

『月神抜刀！』

そして右手で柄を握り、月神をベルトから抜刀。抜刀と共にブックが展開。展開したページには、右肩に白いペガサスと翼を持つ純白の剣士が描かれていた。

天馬

「変身！」

『シャイニングペガサス！』

天馬の背後のブックが展開し、中から純白のペガサスが出現。ペガサスは天馬と融合し、天馬はブックに描かれている純白の剣士へと姿を変えた。

『月神一冊！純白の翼と幻想剣月神が交わりし時、幻想の剣が空を駆ける！』

レックス

「天馬が……変身した!？」

天馬の変身にレックス達はおろか、メレフとカグツチもが驚愕した。

メレフ

「貴様、その姿は!？」

???
(天馬)

「俺は幻想の剣士、《仮面ライダーグレイウス》！」

キイイイーン！

すると突然、月神が輝き出した。

グレイウス(天馬)

「はああああああああ!!」

グレイウスは月神を天に掲げ、空に向けて光の柱を放つ。すると、雲海の下から10の光が現れ、光は10本の聖剣となってグレイウスの周囲に突き刺さった。

グレイウス(天馬)

「レックス！」

レックス

「分かった、みんな剣を取れ！」

レックス達は立ち上がり、レックスは炎の聖劍《火炎劍烈火》、ホムラは煙の聖劍《煙叡劍狼煙》、ニアは水の聖劍《水勢劍流水》、ビヤッコは時の聖劍《時国劍界時》、トラは雷の聖劍《雷鳴劍黃雷》、ハナは音の聖劍《音銃劍錫音》を手にする。

カリバー（クリス）

「コレを使い！」

更にカリバーがレックス達にブックを投げ渡し、レックスは表紙に紅のドラゴンが描かれた赤いワンダーライドブック《ブレイブドラゴン》、ホムラはまるで百科事典の様な表紙をした深紅のワンダーライドブック《昆虫大百科》、ニアは表紙に青いライオンが描かれた青いワンダーライドブック《ライオン戦記》、ビヤッコは表紙に様々な海の生物が描かれた黒いワンダーライドブック《オーシャンヒストリー》、トラは表紙に黄金のランブが描かれた黄色のワンダーライドブック《ランブドアランジーナ》、そしてハナはヘンゼルナッツとグレートルブックを受け取り、カリバーと共にグラディウスの横に並び立つ。

レックス

「みんな行くぞ！」

レックスの掛け声で、レックス・ホムラ・ニア・ビヤッコ・トラ・ハナは一斉にブツクの表紙を開く。

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた…』

『この薄命の群が舞う、幻想の一節…』

『この蒼き鬣が新たに記す、気高き王者の戦いの歴史…』

『この群青に沈んだ命が、今をも紡ぐ刻まれた歴史…』

『とある異国の地に、古から伝わる不思議な力を持つランプがあった…』

『とある森に迷い込んだ、小さな兄妹のおかしな冒険のお話…』

レックス・ニア・トラは腰に出現したベルトに聖剣を納刀し、ベルトのスロットにブツクをセットし抜刀。セイリユウは一旦レックスのヘルメットから離れた。

『烈火抜刀！』

『流水抜刀！』

『黄雷抜刀！』

レックス・ニア・トラ

「変身！」

『ブレイブドラゴン！』

『ライオン戦記！』

『ランプドアラランジーナ!』

3人の背後に巨大なブックが現れ、中から紅のドラゴン、青いライオン、黄金のランプの魔神が出現。

『烈火一冊! 勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

レックスはドラゴンと融合し、炎の剣士《仮面ライダーセイバー》に変身。

『流水一冊! 百獣の王と水勢剣流水が交わる時、紺碧の剣が牙を剥く!』

ニアは青いライオンと融合し、水の剣士《仮面ライダーブレイズ》に変身。

『黄雷一冊! ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わる時、稲妻の剣が光り輝く!』

そしてトラは黄金のランプの魔神と融合し、雷の剣士《仮面ライダーエスパーダ》に変身した。

ホムラ・ハナ

「変身！」

ホムラとハナはブックを聖剣にセットし、トリガーを引いてページを展開。

『狼煙開戦！』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！銃剣撃弾！』

2人の背後に巨大なブックが現れ、ホムラは煙に包まれ、ハナは本から現れた無数のお菓子と融合。

『FLYING！ SMOG！ STING！ STEAM!!昆虫CHU大百科！』

『銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！』

煙が消えると、ホムラは煙の剣士《仮面ライダーサーベラ》、ハナは音の剣士《仮面ライダースラッシュ》に変身した。

『揺蕩う、切っ先!』

『錫音楽章! 甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む!』

ビヤッコ

「行きます!」

ビヤッコは時国剣界時にブックをセットし、口で刀身部分を引き抜き頭上に放り投げた。そして大きくジャンプし、刀身が上下反転したタイミングで右足に持つグリップと合体。

『界時逆回!』

ビヤッコ

「変身！」

ビヤツコの背後に巨大なブックが出現し、中から無数の魚たちが出現。

『時は、時は、時は時は時は！我なり！ オーシャンヒストリー！』

ビヤツコは魚たちと融合し、刻の剣士《仮面ライダーデュランダル》に変身。

『オーシャンバツシャーン！（バツシャーン！）』

そして変身完了と同時にブレイズの隣に着地。残りの聖剣はグラディウスの身体に吸収された。

メレフ

「何だと!？」

セイリユウ

「コイツはビックリ仰天じゃわい！」

レックス達の変身にメレフとカグツチは驚愕し、セイリユウは仰天した。

ブレイズ（ニア）

「ビヤッコ、あんたヒト型になってる！」

デュランダル（ビヤッコ）

「えっ？そんな筈……ええっ!？」

スラツシユ（ハナ）

「ご主人、ハナと背が同じですも。」

エスパーダ（トラ）

「ホントだも！どうなってるも!？」

変身に伴ってかビヤッコはヒト型に変わり、トラは身長が大幅に伸びた。

セイバー（レックス）

「みんな、反撃開始だ！」

セイバー達は聖剣を構え、メレフとカグツチに向かって走り出す。

カグツチ

「メレフ様、来ます！」

メレフ

「っ!?!コノツ！」

メレフは剣を振るい、炎の斬撃を放つ。

『界時抹消!』

デュランダルは刀身を引き抜き、グリップのトリガーを押す。すると、セイバー達が一斉に姿を消した。

メレフ

「何っ!?!」

『再界時！』

すると、背後にブレイズ・エスパルダ・デユランドル・スラツシユが出現し、ブレイズ・エスパルダ・スラツシユは剣を、デユランドルは槍を振り下ろす。メレフとカグツチは後ろに下がり、紙一重で攻撃を避ける。

セイバー・グラディウス

「うおおおおおおお！」

すると、右側からカリバーとグラディウス、左側からセイバーとサーベラが接近し、メレフに左右4人同時の剣撃を叩き込む。

カグツチ

「させません！」

カグツチがメレフの前に立ち、カグツチはバリアを展開し攻撃を防いだ。だが勢いに負け、2人は後方に吹き飛ばされた。

カリバー（クリス）

「全員が変身してもこの威力、流石は帝国最強のドライバーとブレイドだ。」

サーベラ（ホムラ）

「レックス、このままではキリがありません！」

セイバー（レックス）

「ああ、何か手は………っ!!」

セイバーは塀の向こう側に、巨大な貯水タンクを発見し思い出した。カグツチの属性は火。そして火は水に弱い。

『必殺読破!』

セイバーは火炎剣烈火をベルトに納刀し、トリガーを引いて再び抜刀。

『烈火抜刀! ドラゴン! 一冊斬り! ファイアー!』

火炎剣烈火から炎の斬撃をメレフに向けて放つ。メレフは剣で斬撃を風払い、辺りに爆煙を発生させる。

セイバー（レックス）

「みんな来い！」

爆煙がメレフとカグツチの視界を遮る間に、セイバー達は正門から基地の外へ出る。

メレフ

「逃がすか！」

メレフとカグツチは後を追う。

セイバー（レックス）

「ホムラ、最大火力いける？」

サーベラ（ホムラ）

「はい、あと2回くらいなら！」

セイバー（レックス）

「十分！」

セイバー達はメレフとカグツチを貯水タンクの前に誘い込み、セイバーはメレフと対峙する。

『ドラゴン！フムフム……………』

セイバー（レックス）

「食らえ！」

『習得一閃！』

セイバーは烈火の剣先にブレイブドラゴンブックを翳し、剣先から火炎放射を放つ。

メレフ

「芸が無さすぎるぞ！」

メレフは剣で火炎放射を切り裂く。切り裂かれた火炎放射は貯水タンクの支柱に命中し、支柱は熱せられ輝き出す。

グラディウス（天馬）

「今だ！」

次の瞬間、グラディウス・ブレイズ・エスパーダが貯水タンクの背後からジャンプし姿を見せる。

『必殺読破！』

3人は剣をベルトに納刀し、トリガーを2回引く。

『ペガサス！ライオン！アランジーナ！一冊撃！』

グラディウス・ブレイズ・エスパーダ

「いつけえええええええ!!」

『ウォーター！サンダー！』

そして右足にエネルギーを集中させ、貯水タンクにライダーキットを叩き込む。キットの衝撃で支柱が歪み、貯水タンクは強烈な金属音と共に傾き始める。

メレフ

「貯水タンクだと!?!」

メレフとカグツチは急いで退避しようとするが、デユランダル・カリバー・スラッシュユが攻撃し行く手を塞ぐ。

バツシャーン!

そして貯水タンクが倒れ、メレフとカグツチは大量の水を浴びた。

『ドラゴン！一冊撃！ファイアー！』

セイバー（レックス）

「ホムラ！」

サーベラ（ホムラ）

「はい！」

そして、メレフとカグツチの上空からセイバーとサーベラが現れ、ホムラ力と火炎剣烈火の力を合わせた、フルパワーのバーニングソードを放った。

セイバー・サーベラ

「《バーニングソード》！！」

メレフ

「しまった！」

ドカーン！！

バーニングソードの威力は凄まじく、命中と共に猛烈な熱風と水蒸気を発生させた。そして熱風と水蒸気がおさまると、その場にはメレフとカグツチの姿。セイバー達の姿は何処にも無かった。

メレフ

「逃げたか……心外だな。」

カグツチ

「何がですか？」

メレフ

「このメレフ、まさか戦いで手を抜かれるとは。」

カグツチ

「あの少年がですか？」

メレフ

「当てる事も出来た筈だ。なのに、奴はワザと外した。それに単に力任せの攻撃しか出れないと思っていたが、どうやら機転も利く様だ。」

メレフは倒れた貯水タンクを見て、そう呟いた。

メレフ

「天の聖杯……あの少年達と共にあるのなら、解き放つてみるのも一興か。」

カグツチ

「メレフ様？」

メレフ

「いずれ、また会う時が来るだろう。その時は今一度……」

夜空に輝く星に目を向け、メレフは静かに笑みを浮かべた。

To Be Continued…

第九話

くノルキア森林区 旅人の止まり木く

レックス達は無事トリゴの街を脱出し、《ノルキア森林区》の高台にある《旅人の止まり木》にたどり着いた。

天馬

「よかった、追ってこないみたい。」

クリス

「上手くまけたみたいだな。」

レックス

「取り敢えず一休みしよう、もう限界………」

レックスはしやがみこみ、トラも限界なのかうつ伏せに倒れた。

グサツ

突然、ニアが水勢剣流水と時国剣界時を地面に突き刺した。

ホムラ

「ニア？」

ニア

「此处で御別れだ、世話になったね。」

ビヤッコ

「お世話になりました。皆さんの旅の御無事を、祈っております……………」

ニア

「じゃあね……………」

ニアとビヤッコはレックス達に別れを告げ、その場から静かに離れる。

レックス

「樂園に行きたいんだ！」

だがレックスが突然叫び、ニアとビヤッコは足を止め振り返った。

ニア

「え？」

レックス

「約束したんだ、ホムラを楽園に連れていくって……俺、命を分けて貰ったホムラの願いを叶えてやりたい！ だけど、ホムラを狙おうとしている奴らは多い。それって巨神獣の数が減って、住む場所が失くなって、それで争いが起こって、争いに勝つためには強い力が必要で、だからホムラを……楽園の存在が証明されれば、そんな争いは無くなるかもしれない。だけど……」

レックスはふと、左手に持つ火炎剣烈火に写る自分を見る。レックスの脳裏に、先程のメレフとの戦いの光景と、防戦を強いられ手も足も出なかった自分の姿が過った。

レックス

「さっきのメレフって奴と戦って分かった。俺の力だけじゃ、ホムラを守れない……だから、力を貸して欲しいんだ。」

レックスは顔を上げ、ニアに問い掛けた。

ニア

「楽園って、アンタ本気でそんな与太話信じてんの？」

レックス

「ホムラから故郷は楽園だって聞いた。ホムラは今此処にいる。なら楽園だって……
だろ？」

ニア

「何だよ、そのモーフみたいな三段論法は……じゃあもし、ホムラが嘘付いたら？楽
園に行くの見せかけて、ある日頭からボリボリ食われちましたらどうすんのさ？」

レックス

「ホムラはそんな事しない！」

ホムラ

「頭からとか無理です！お腹壊しちゃう……」

天馬・レックス・ニア・トラ

「えっ!？」

ホムラの予想外の返答に思わずギョツとするレックス達。

クリス

「そうそう、粉々になった頭蓋骨や歯の欠片が食道や胃に刺さってチクチク……………」

共感しているのか頷くクリス。

クリス

「つておい！マジに受け取ってどうする!?!」

と思いきや、ホムラにツツコミを入れた。

ニア

「……………プクク、アハハハハ！」

二人のやり取りがツボに入ったのか、ニアは突然大爆笑。一頻り笑い終わると、水勢

劍流水に目を向ける。

ニア

「翠玉色のコアクリスタルは天の聖杯の証しか……………」

シャキン

そして、ニアは自身が突き刺した水勢劍流水を引き抜いた。

ニア

「いいよ、面白そうじゃないか。アタシも見てみたくなったよ、楽園！」

レックス

「ニア……………！」

ニア

（緑溢れる天空の大地か。伝説が本当なら、アタシらだって……………）

こうして、ニアはレックス達と共に旅をする事を決めた。一行は止まり木の下で火を

焼き、野宿をすることにした。

レックス

「イテテ……」

ホムラはレックスの右腕の怪我を治療し包帯を巻いていたが、どうやらレックスは傷が痛む様だ。

ホムラ

「ごめんなさい！強く巻きすぎました？」

レックス

「えっ？いやいや、全ッ然大丈夫！」

レックスは大丈夫な事をアピールするため右腕を回す。

レックス

「ほら、こんなに回したって痛くも痒くも（ズキッ）なガツ!?くうう……」

が、案の定右腕に痛みが走った。

天馬

「無理しちゃだめだよ……………」

レックス

「ごめん……………でも、だいぶ痛みもひいてきたよ。」

ホムラ

「ニアが調合してくれた薬のおかげですね。」

ニア

「ニヒヒ。」

ニアは笑いながらピースする。

クリス

「……………ん？ホムラ、お前も怪我を……………」

クリスはホムラの右腕に傷を見つけた。その傷は丁度、ホムラが治療したレックスの傷と同じ場所。

レックス

「ホントだ、大丈夫？」

ホムラ

「大丈夫、かすり傷ですから。」

レックス

「ちよつと見せて、俺がやるよ。」

レックスは薬と包帯を手に取り、慎重にホムラの怪我を治療する。

ホムラ

「ありがとう、レックス。」

レックス

「いいさ、このくらい………」

一生懸命に治療をするレックスと、優しく見つめるホムラの右腕に包帯が巻かれていた。

ホムラ

「うん、良い感じ。……ね、レックス?」

ホムラはレックスに身を寄せ、レックスの右腕に自身の右腕を近づけた。

ホムラ

「同じですね?」

レックス

「えっ?ああ、うん……同じだ、ホムラと。」

ヒュウウウ

突然、レックス達の側を風が通り抜けた。風は焚き火を揺らし、火の粉が夜空にキラキラと舞い上がる。それはとても綺麗な光景だった。

天馬

「うわぁ……………」

ホムラ

「キレイ……………」

レックス

「ああ、キレイだ……………やっぱ、ホムラが起こした焚き火だからかなあ?」

ホムラ

「えっ?」

レックス

「ああつーいや、その、変な意味じゃなくて……………焚き火起こすの上手だなあつて言うか、えくつと……………」

クリス

「別に誤魔化す事じゃないだろうに……………」

ホムラ

「フフツ」

慌てて誤魔化すレックスを見て微笑むホムラと、呆れながらも微笑むクリスだった。



くイーラ基地く

その頃、アルスト某所にあるイーラの基地にはシンとメツが居た。そこには和風の青い鎧をした赤縁眼鏡の青年《ヨシツネ》と、黄金の翼を持つ少女のブレイド《カムイ》も居た。

ヨシツネ

「現在、天の聖杯はグーラ領をトリゴの街から離れる様に移動しています。」

メツ

「街を離れてだと？そつちには何も無いだろ？」

ヨシツネ

「そのまま外に出るのかもしれませんが。ああそれと、例の定期便も出港した様です。」

メツ

「アーケディアでの洗礼か、律儀な奴らだ。」

シン

「その件は俺が対処しよう。お前達は天の聖杯を追え。」

ヨシツネ

「了解。ところで、ニアはどうします？どうやら彼女は今、天の聖杯と行動を共にしている様です。」

シン

「お前の好きにしろ。」

シンは静かにその場から歩き出す。

メツ

「シン、あまり無理をするなよ？」

シン

「ああ……………」

シンは静かにその場から去った。

ヨシツネ

「天の聖杯……一度この目で見ておきたいと思ってました！」

メツ

「ならお前は運が良いぜ？天の聖杯以上に、もっと面白いモノが拝める。」

ヨシツネ

「天の聖杯以上に面白いモノ？」

メツ

「ああ、俺もシンも今まで見たことなかった未知の力、その名も……仮面ライダーだ。」



く グーラ 造船所く

翌日、レックス達は旅人の止まり木を離れ、グーラの外れにある造船所跡に来ていた。

『三匹の子ブタ！フムフム……習得一閃！』

天馬は月神に子ブタ三兄弟ブックを読み込ませ、トリガーを引き三匹の子ブタを召喚。

天馬

「みんな、頼んだよ？」

子ブタ達は早速周囲の瓦礫を集め、木を伐採し、岩を採掘し、何かを作り始めた。

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ旅人の止まり木ゝ

遡ること数時間前、旅人の止まり木で朝を迎えた頃。レックスはニア達にあるものを見せた。

トラ

「それ、何だも?」

レックス

「サルベージヤーの必携アイテム、《雲海羅針盤》。雲海の地図みたいなもんだよ。今日って何年の何月だっけ?」

ホムラ

「ええつと………神暦4058年9月5日です。」

レックスはホムラの教えてくれた日付を羅針盤に入力する。すると、羅針盤が動き出した。

セイリユウ

「羅針盤によれば、世界樹には此処グーラからが一番近いようじゃの。」

天馬

「問題は雲海を渡る船だね。どうしよう………」

クリス

「船が無いなら作れば良い。材料さえ手に入れば、ワンダラーライドブックの力を応用して作れる筈だ。」

トラ

「それならトラ、良いところ知ってるも！グーラのお尻のところ、今は誰も使ってない古い造船所があるも。近くには森もあるから、材料もきつと手に入るも！」

レックス

「よし、じゃあ先ずはそこに行こう。」

~~~~~

〜造船所〜

レックス達は雲海を渡るため、ワンダーライドブックの力を使って船を作ろうとしていた。

レックス

「船が出来るまでどのくらい？」

クリス

「分かん。朝までには完成する筈だ。」



ニア

「じゃあさ、みんなで手分けして食べ物探さない？いくら世界樹に一番近いって言っても、どのくらい掛かるか分かんないし。取り敢えず今夜の分と、明日船で食べる分だけでもさ。」

天馬

「そうだね。じゃあ、俺とクリスは近くに集落が無いか探してみるよ。」

ニア

「アタシとビヤッコは森で山菜を探してみる。」

レックス

「なら俺とホムラは栈橋で魚釣りだ。トラとハナは船を守つて。」

トラ

「了解だも、レックスのアニキ！」

一行は手分けして食べ物集めに向かった。そして数時間後……

天馬

「見て見て！こんなに沢山分けてもらえたよ！」

天馬とクリスは小麦粉、卵、チーズ、パン、ジャガイモ、ネギ、ブロッコリー、ソーセージ、そして油と、沢山の食材を持って戻ってきた。

ニア

「こつちも沢山手に入ったよ！」

ニアとビヤッコも沢山の山菜を持って戻ってきた。

レックス

「俺達も一応釣れたは釣れたんだけど……」

だがレックスとホムラは浮かない顔だった。レックスが持つてるバケツを覗き込むと、中には大きくて活きの良いタコが三匹入っていた。

ニア

「ゲッ!? タコじゃん！」

天馬

「おつ、タコだ！」

タコを見てテンションが上がる天馬に対し、レックス達は何やらテンションが下がっている。

ニア

「アンタ、何でそんなに嬉しそうなんだよ……………」

天馬

「何でって……………もしかして、みんなタコ嫌いなのか？」

レックス

「嫌いって言うか、そもそもタコは食べないんだよなあ……………」

日本では当たり前前に食べられているタコだが、実は外国では《悪魔の魚》と呼ばれ忌み嫌われていたという歴史がある。レックス達の反応を見るに、恐らくアルストにも同じ様な風習があるのかも知れない。

天馬

「そうなんだ………ねえホムラ。」

ホムラ

「はい？」

天馬

「今夜の料理番、俺にやらせて。俺がタコを使った美味しい料理を作ってあげる。」

ホムラ

「タコを使った………？」

レックス・ホムラ

「美味しい料理？」

それから少し時が過ぎ夕方、一行は棧橋近くで焚き火をしていた。

天馬

「さてと、それじゃ始めるね。」

天馬の目の前には小麦粉、卵、ネギ、油、そして予め塩揉みしてボイルしたタコ。さ

らにボールと、半球が幾つもある鉄板が置いてあった。

トラ

「天馬のアニキ、いったい何をやる気だも？」

レックス

「タコを使った美味しい料理を作ってくれるみたいだけど……あれをどう料理する気なんだ……？」

期待より不安が勝っているレックス達には目もくれず、天馬は小麦粉と卵をボールに移し、水を加え混ぜ合わせ生地を作る。更にネギを輪切りに、タコをぶつ切りにしている。

天馬

「紅しようがと天カスが無いけど、まあ大丈夫かな？」

焚き火を挟み込む様に丸太を置き、その間に例の鉄板を置く。半球内に油を塗り、中に生地を流し込む。更に生地の中にぶつ切りにしたタコとネギを入れ、最後に鉄板全体

がヒタヒタになるまで生地を流し込む。そして待つこと数分……

天馬

「さあ、よく見てよ？」

天馬は右手に針を持ち、タコが入った生地を鉄板から剥がし、くるとひっくり返す。鉄板から剥がし、くるとひっくり返す。天馬が作っていたのは《タコ焼き》だった。

ハナ

「おお、綺麗に丸くなってますも。」

初めて見る光景に興味津々のレックス達。全部をひっくり返し全体に火が通ったところで、天馬はタコ焼きを皿に盛り付け、ソースの代わりに塩を振りかけた。

天馬

「お待ち堂さま、天馬特製タコ焼きだよ。冷めないうちにどうぞ。」

恐る恐るレックス達はフォークでタコ焼きを射し、そして一斉に口に運んだ。

レックス

「もぐもぐ………ん？美味い………美味いよ天馬！」

セイリユウ

「ぬおっ!?コイツは、今まで食べたことの無い味じゃわい！」

トラ

「もももっ!?ホントにこれがさっきのタコかも!？」

ホムラ

「外はカリ、中はトロ、とつても美味しいです！」

ニア

「まさかタコがこんなに美味しくなるなんて、恐るべし………」

ビヤッコ

「ええ、とても美味しゅう御座います！」

天馬のタコ焼きはレックス達に大好評。天馬も喜んでもらえて嬉しかった。

レックス

「もしかして、これって天馬の世界の料理？」

天馬

「そうだよ。」

ニア

「天馬の世界？ どう言うこと？」

天馬

「えっ？ ……あ、そう言えばホムラやニア達には言ってなかったね？ 実は俺……………」

天馬はホムラとニア達に、以前レックスとセイリユウした話をした。

ホムラ

「宇宙から来たんですか!？」

ニア

「嘘!?!マジで!?!」

トラ

「もももっ!?!」



案の定みんな仰天した。

天馬

「マジだよ。最初は一人で、暗い廃墟をさ迷ってて、途中で不思議な本を見つけたんだ。その時にクリスと出会って、その後はいつの間にかアルストでレックスとセイリユウさんに助けられて……………」

ビヤッコ

「なるほど、色々大変でしたね……………」

ニア

「そう言えば、一個聞きたかったんだけどさあ……………」

ニアはそう言うところとフオークと皿を置き、水勢剣流水を手を取った。

ニア

「天馬の月神も、アタシ達の聖剣も、まるで天馬に呼び寄せられる様に出てきた。しかもアタシ達の聖剣に関しては雲海の中から、オマケにメレフと戦った時、天馬の身体から

新しいブックまで出てきた……クリス、あんた確かレックスより先に天馬に会ってるんだろ？何も知らないなんて事は無いよね？」

ニアはクリスを警戒する様に睨み付ける。

クリス

「……………天馬と初めて会った時、俺は天馬にあるものを預けた。俺の中に眠っていた、かつての剣士達の全てだ。」

レックス

「剣士達……………それって、俺達が今持つてる聖剣の？」

クリス

「そうだ。俺の変身するカリバーの他にも、かつて世界を守るために戦った剣士達が居た。その剣士達の全て、つまり聖剣とワンダーライドブックの全てを、俺のコアクリスタルごと天馬の身体に一時封印した。そしてこの間の古代船で、俺はその封印を解き、闇黒剣月闇を自らのアーツとして実体化。この時、ワンダーライドブックの全てを俺自身の身体に移した。」

天馬

「だからあんなに沢山ブックを持ってたんだね。」

クリス

「恐らく月神が天馬に呼び寄せられたのは、天馬に月神の剣士となる資格があったからだろう。そして剣士達の全てを得た天馬に月神が反応し、新たなワンダーライドブックが生まれ、雲海中に散らばった聖剣を呼び寄せたんだ。」

レックス

「じゃあ、俺達が変身出来るのは……………」

クリス

「レックス達にも、剣士になる資格があつたと言うことだ。聖剣とは剣士を選ぶもの。ブレイドと同じく相手にその資格がなければ、聖剣は力を発揮しない。」

ビヤッコ

「……………それにしてもクリス様、貴方随分と聖剣や剣士について詳しいのですね。何処でその様な知識を？」

クリス

「どういう訳か、天馬と会った時から頭の中にあつたんだ。何故かは俺にも分からな  
い。」

ビヤッコ

「そ、そうですか……………」

その後、一行は食事を終え眠りについた。そして翌朝……………

ブヒー！ブヒー！ブヒー！

ニア

「何だようるさいなあ……………」

レックス

「どうした？ふああああ……………」

一行は子ブタ達の鳴き声で目を覚ました。寝ぼけながら鳴き声がする方を見ると、造船所のドックに立派な木造の帆船があった。

ハナ

「ご主人、これは?!」

トラ

「ふ、船だも!？」

たった一晩で船を作ってしまった事に、眠気が覚めるほどに驚くレックス達。

ニア

「凄い……………たった一晩でこんなデカイ船作っちゃうなんて。」

子ブタ達は「えっへん!」と言わんばかりに鼻を鳴らした。

『西遊ジャー! フムフム……………習得一閃!』

その後、天馬が西遊ジャーニーブックの力で船底に雲のフロートを付け、出港の準備が整った。

天馬

「準備完了!」

レックス

「よし………出港だ、みんな！」

トラ・ハナ

「アイアイサー！キャプテン！」

いつの間にか船乗り気分のレックス達。

ニア

「何でレックスがキャプテン？まあ楽しいから良いけど！」

ニアも舵輪の前に立つ。

レックス

「帆を開け！」

天馬・クリス

「帆を開けー！」

バサッ！

レックスの掛け声を合図に、天馬とクリスが同時に帆を開く。帆はグーラからの風を受け、ゆっくりと造船所を離れる。

ホムラ

「動きました!」

レックスは雲海羅針盤とグーラの地図を取り出し、現在地と世界樹の方角を調べる。

レックス

「ニア、取り舵一杯!10時の方向へ!」

ニア

「取り舵一杯、ヨーソロー!」

ニアは舵輪を左に勢いよく回す。船は進路を左に変え、帆は追い風を受け速度を上げ始めた。

レックス

「目指すは世界樹、全速前進だ！」

「オー!!」

船はグーラを大きく迂回し、世界樹目指して真つ直ぐ突き進む。

-----

く雲海上 世界樹付近く

そして出港からおよそ数十数時間、一行を乗せた船は世界樹の直ぐ近くまで来た。  
た。

レックス

「これが世界樹……」

天馬



「凄い、まさかここまで巨大だったなんて……………」

ニア

「こんなに近くで見たのは初めてだよ……………」

世界樹の予想以上の迫力に圧倒されるレックス達。だが肝心の世界樹周囲は雲海が滝のように流れ落ちていた。

レックス

「近くに来たのは良いけど、どうやって行けばいいんだろう？」

天馬

「此処から先は船で行くのは無理だね……………レックス、クリス、ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンで空から行こう。」

クリス

「良いだろう。」

レックス

「OK、分かった。」

レックスはブレイブドラゴンブック、クリスはジャアクドラゴンブックを手取る。二人はブックの表紙を開き、ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンを召喚した。

レックス

「よし、それじゃ……………」

ホムラ

「ダメ！逃げてレックス！」

突然、ホムラが叫び出した。

レックス

「ホムラ、どうしたの？」

ゴゴゴゴゴゴ……………！

ニア

「な、何だ？」

辺りに轟音が響き渡り、雲海の中から巨大な竜の様な怪物が現れた。

ホムラ

「《サーペント》！」

レックス

「えっ、サーペント………？」

サーペントは船に気付き、レックス達を見る。

天馬

「マズい！クリス、マストを切り倒して！ブレイブドラゴン、ジャアクドラゴン、力を貸して！」

天馬の咄嗟の判断で、クリスは月闇でマストを切り落とす、ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンは船の後方に回った。

天馬

「みんなしつかり掴まって！面舵一杯、全速離脱！」

天馬は舵輪を右に勢いよく回し、船を急速で反転させる。即座にブレイブドラゴンとジャアクドラゴンが後ろから船を押し、急いでサーペントから離れる。だがいくら逃げてもサーペントは追いかけてくる。

ホムラ

「やめてサーペント！どうして？私の声が聞こえないの!？」

ザバーン！

サーペントは尻尾を大きく雲海に打ち付け、船を吹き飛ばした。

レックス

「ダメだ、逃げ切れない！」

だが突然、サーペントは船を追うのを止め世界樹の方へ戻っていった。

天馬

「どうしたんだ？あいつ、急に……………」

ハナ

「皆さん、前！」

ハナが何かに気付き進行方向を指差す。ハナが指差す先には、グーラとは違う巨大な巨神獣が居た。

ビヤッコ

「アレは！」

セイリユウ

「《インヴィディア》の巨神獣！」

インヴィディアは口を大きく開け、雲海を吸い込み始める。同時に船もインヴィディアの口に吸い込まれ始めた。ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンが正面に回り船を

押し戻そうとするが、吸い込む力が強すぎて歯が立たない。

レックス

「ヤバい！食われる！」

ゴゴゴゴゴゴ!!

レックス達はインヴェディアに飲み込まれ、インヴェディアは口を閉じ雲海の中に消えた。

## 第十話

天馬

「う〜ん……………ん？」

気が付くと、天馬は草原で俯せに倒れていた。目を開けると目の前には花が咲き、草原と青空が広がり、そして鼻先にはテントウムシが止まっていた。天馬は起き上がり、テントウムシを手で優しく取ると、そのまま空へと放した。

天馬

「何処だココ？ 確かレックス達と一緒に世界樹に行こうとして、巨神獣に飲み込まれて……………」

辺りを見回すが、草原には何故か自分しか居なかった。すると……………

ゴーン

ゴーン

何処かから鐘の音が聞こえてきた。

天馬

「鐘の音？協会か時計塔でもあるのかな？」

天馬は鐘の音を頼りに、一人草原を歩く。しばらく歩くと、丘の上にある木の下にたどり着いた。

天馬

「……………ッ！」

丘の上からの景色を見て、天馬は言葉を失った。丘の向こうには豊かな森と、幾つもの家々、そして遙か遠くに立派な協会が見える。

天馬

「此処は……………？」



???

「此処は楽園……私達の故郷、貴方達が目指そうとしてる場所。」

天馬

「っ!？」

突然後ろから誰かに声をかけられ、天馬は振り向いた。そこには白い衣装に身を包んだ長い金髪の美しい少女が居た。少女の胸には、ホムラと同じ翠玉色に輝くコアクリスタルがあつた。

天馬

「君は……?？」

少女

「私は《ヒカリ》。見ての通りブレイドよ。」

ヒカリは天馬の隣に立ち、共に丘からの景色を見る。

ヒカリ

「此処は私達の記憶の中の楽園……貴方達が目指してる楽園は此処じゃない。」

天馬

「そ、そうなんだ……あ、俺は……」

ヒカリ

「知ってるわ、天馬でしょ？」

天馬

「えっ？」

まだ自己紹介をしていないヒカリに自分の名前を呼ばれ、天馬は驚いた。

ヒカリ

「1つ忠告しとくわ。今のままじゃ、貴方は何れ大事なモノを失う。あの子達と一緒に楽園を目指すって言うなら、それ相応の戦う力を身に付けなさい。」

天馬

「戦う……力？」





「天馬……おい天馬！起きろ！」

天馬

「ツ!!」

気が付くと、今度は固い岩の上に仰向けで倒れていた。だが辺りは暗く、イヤに湿っぽい空気が漂っていた。

クリス

「気が付いたか。」

すると、クリスが上から顔を覗かせた。

天馬

「クリス……」

天馬はクリスの手を借り、ゆっくりと立ち上がる。近くにはクリスの他に、レックス

やホムラ達の姿もあった。

天馬

「レックス、みんな……………」

ニア

「よかったあく、全ツ然起きないから心配したんだよ？」

天馬が目を覚まし、ニアは安心した。

天馬

「ごめん……………此処は？」

セイリユウ

「インヴェディアの巨神獣の中じゃ。またトンでもないモンに飲み込まれたモンじゃのう……………」

レックス

「ちよつと待ってて、今ライトを出すから。」

レックスはライトを取りだし、スイッチを入れ辺りを照らす。辺りには船の残骸だらうか、大小幾つもの瓦礫が堆積していた。

トラ

「何だか、気味悪いところだも……」

レックス

「俺達も……ああなっちゃうの？」

ニア

「よ、止しなよ！縁起でもない！」

ビヤッコ

「皆さん、出口を探しませんか？インヴェディアの街は背中の方にあると聞きます。何とかそこに出ることが出来れば……」

ニア

「そうだね！さっさとこんなトコ離れよう！」

何故か凄く慌てるニア。すると、ハナが何かを見つけた。

ハナ

「今、あそこで何か光りましたも！誰かいるですも！」

一行はハナが指差す方向を見るが、何も無い。

ニア

「何も無いけど……見間違いじゃないのかい？」

ハナ

「見間違いじゃないですも。フワフワと動いてましたも。」

クリス

「まさか人魂……だったりするか？」

ニア

「ちよ、やめてよクリス!!」

何故かクリスの発言に過剰に反応するニア。その様子を見て、レックスはニヤリと笑う。



レックス

「ニア、もしかして怖いのか？」

ニア

「く、下らないって言うてんだよ！子供かよ！って……あれ？」

ここで、ニアがある異変に気付いた。

ニア

「ねえレックス、ホムラは？」

レックス

「え？ホムラなら其処に……」

と言つてレックスは振り向くが、振り向いた先にホムラの姿は無かった。

天馬

「ホムラが居ない？」

レックス

「どこ行ったんだろう………ホムラ？ホムラー！」

レックスはホムラを呼ぶ。すると………

ホムラ

「呼びましたあ？」

天馬・レックス

「うわあああっ!？」

突然、天馬とレックスの背後に火の玉を持ったホムラが現れた。天馬とレックスは驚きのあまり翔び上がった。

天馬

「びっくりしたあ………」

レックス

「な、何やってんだよ!?!止めろよそういうの!!」

ホムラ

「何って、向こう側をちよつと確認に……………どうしたんです？」  
クリス

「こゝも暗くては面倒だな……………天馬、最光を出してくれ。」

天馬

「分かった。」

天馬は光の聖劍《光剛劍最光》を召喚し右手に装備。

キイイイイン！

最光の刀身が強い光を放ち、辺りを明るく照らした。

セイリユウ

「おお！随分と明るくなったわい。」

レックス

「光の聖劍か！ナイス天馬！」

天馬

「これだけ明るかったらもう大丈夫だね？それじゃ、出口を目指して出発進行だ！」

一行は天馬を先頭に、出口を目指してインヴェイディアの奥へと歩き始めた。だが数時間歩いてても一項に出口が見える気配は無く、仕方なく野宿する事にした。

ホムラ

「さあ、どうぞ召し上がれ。」

今回はホムラが料理を担当。献立は先日、天馬が持ち帰ったチーズと食材を使ったチーズフォンデュだ。

「いただきますーす！」

一行は早速、串に刺したパンにチーズを絡ませ、そして口に運ぶ。

天馬

「美味しい！」

レックス

「美味い！」

トラ

「やっぱりホムラちゃんの料理は最高だも！」

相変わらずホムラの料理は大好評。ホムラもレックスの隣に座り、共に食事をした。

ニア

「ねえ天馬、さっきの聖剣……最光だっけ？ どうやって出したの？」

天馬

「分からない。クリスに出せて言われて頭の中でイメージしたら、何故か召喚出来たんだ。クリス、何か知らない？」

クリス

「前に俺は、天馬に剣士達の全てを預けたと言っただろ？ つまり、天馬には全ての聖剣の主導権があると言うことだ。現在、光剛剣最光を含む残りの聖剣は全て天馬の中に封じ込められている。だが剣の主導権を持つ天馬は、自身に封じ込められた聖剣を自由に召喚し使う事が出来るという事だ。」

天馬

「クリスが本を出せるみたいに？」

クリス

「そんなところだ。」

レックス

「なあクリス、もつと聖剣と本のこと教えてくれよ！」

クリス

「良いぞ。でも、長くなるから話は食べ終えてからだ。」

レックスは了解した。そして食事を終えると、クリスはレックス達の持つ聖剣六本と、天馬が持つ月神と自身の月闇を含む残りの聖剣六本を自身の右前に並べ、ワンダーライドブックを《神獣》《生物》《物語》の三つに分けて左前に置いた。

クリス

「遙か昔、世界を創造し森羅万象を司る《全知全能の書》という本があった。その本には神話、物語、生物、科学技術の源、過去から未来、はじまりから終焉、世界のありとあらゆる全てが記されていた。」

ビヤッコ

「世界の全てが記された本……アカシックレコードの様なモノですね。」

クリス

「ある時、一人の女性が全知全能の書の力で二つの世界を繋げ、五人の若者が異世界に降り立った。後に一人は全知全能の書を守る組織を立ち上げ、もう一人は異世界を守るため残った。だが後の三人は全知全能の書の強大な力に見入られ、全知全能の書の一部を取り込み怪物となった。そして残りを奪おうとして本を守る者達との戦争に発展した。闇黒剣月闇と光剛剣最光は、その戦争の時に異世界で生まれた特別な聖剣だ。戦争によつて全知全能の書はバラバラになり、バラバラになったページから幾つものワンダーライドブックが生まれた。そして月闇と最光を元に、幾つもの聖剣が人の手によつて作られた。その内の最初の本が、レックスが持つ火炎剣烈火だ。」

レックス

「俺の聖剣が最初だったんだ。」

と、クリスはブレイブドラゴン、ライオン戦記、ランプドアランジーナのブックを手に取り、自身の前に並べる。

クリス

「ワンダーライドブックは大きく分けて、伝説・空想上の絶大な力を持つ神獣の伝承を封じ込めたモノ、弱肉強食の世界を逞しく生きる生物の伝承を封じ込めたモノ、童話や昔話といった古くから語り継がれる物語の伝承を封じ込めたモノの三つのジャンルに分けられる。」

続けてクリスは、ブレイブドラゴンの側に火炎剣烈火、ライオン戦記の側に水勢剣流水、ランプドアラランジーナの側に雷鳴剣黄雷を置いた。

クリス

「同様に聖剣も三種類に分けられる。その一つが《聖剣ソードライバー型》。レックスの烈火、ニアの流水、トラの黄雷、そして天馬の月神がコレに該当する。ドライバーに各ジャンルのブックを一冊ずつ、最大三冊まで装填し使えるタイプの聖剣だ。幅色いブックの組み合わせによる高いポテンシャルを持つ一方、複数のブックを使うと変身者に負荷が掛かる欠点がある。」

クリスはブレイブドラゴンの横にストームイーグルと西遊ジャーニーを、ライオン戦記の隣にピーターファンタジスタと、表紙に蒼白のペガサスが描かれた《天空のペガサ



スワンダーライドブック》を、ランプドアランジーナの隣にニードルヘッジホッグとトライケルベロスを置いた。

クリス

「中でも最も相性が良い同色三冊の組み合わせは《ワンダーコンボ》と呼ばれ、変身者の力を最大限に引き出すことができる。だがその分掛かる負担も大きいため、使いこなすには相応の修練が必要だ。」

クリスは続いて、煙叢剣狼煙と昆虫大百科、時国剣界時とオーシャンヒストリー、音銃剣錫音とヘンゼルナッツとグレーテル、更に土の聖剣《土豪剣激土》と、四神の一体《玄武》が表紙に描かれた《玄武神話ワンダーライドブック》、そして風の聖剣《風双剣翠風》と猿飛忍者伝を自身の前に置いた。

クリス

「ホムラの狼煙、ハナの錫音、ビヤツコの界時、そして土豪剣激土と風双剣翠風は《単体型》。剣にブックを直接装填するタイプの聖剣だ。汎用性の高いソードライバー型と違い、見た目や機構等に各々個性を持っている。ソードライバー型より戦闘用に特化した

聖剣で、ブック無しでも己の剣技と体技で敵に対抗できる力を持ったエキスパートとも言える。だがソードライバー程ではないが、コイツらもブック交換による多様性を持っているぞ。」

最後にクリスは、自身の闇黒剣月闇とジャアクドラゴン、光剛剣最光と、表紙に金銀の剣を持つ神が描かれた《金の武器銀の武器ワンダーライドブック》、そして無の聖剣《無銘剣虚無》と、表紙に炎の不死鳥が描かれた《エターナルフェニックスワンダーライドブック》を自身の前に置いた。

クリス

「最後に《ドライバー付随型》。これには俺の月闇と最光、そして無銘剣虚無が当てはまる。ソードライバーの様にブックを装填するドライバーとセットの聖剣だが、ソードライバーの様な多様性を持たない。何故ならこのタイプは、総合的に今までの聖剣を凌駕するからだ。特に月闇と最光は最初に言った通り、今までの聖剣の元になったモノだからな。」

次にクリスは、ワンダーライドブックにそっくりな禍々しい表紙の本を数冊取り出し

た。

クリス

「コレは《アルターライドブック》。簡単に言うなら、ワンダーライドブックの模造品だ。これを使うことで、中に封じ込められている《メギド》と呼ばれる怪物を召喚する事が出来る。オリジナルのブック同様、剣に翳して能力を使う事も可能だ。」

クリスは地面に巨大な魔方陣らしきモノを描き、そこに聖剣と数冊のワンダーライドブックを並べた。

クリス

「異世界での戦争から数千年が経ったある時、失われた全知全能の書の復活を巡って二つの組織が争っていた。一つは世界を侵食し、アルターライドブックを生み出していたメギド軍団。先の争いで全知全能の書を奪おうとした三人だ。もう一つはワンダーライドブックを管理し、メギドから世界の均衡を守っていた剣士達の組織《ソードオプロゴス》。先の争いでメギドから全知全能の書を守っていた者達だ。全ての聖剣と選ばれた本を揃えることで、全てのワンダーライドブックを束ね全知全能の書を復活させ、神

に等しい力を得ることが出来る。だからソードオブロゴスは全知全能の書を守ると同時に復活させない事を使命とし、世界の北と南に拠点を作り、聖剣とワンダーライドブックが一カ所に集まらない様に管理していた。対してメギドは世界の一部、或いは人間を触媒にして大量のアルターライドブックを生み出し、それをワンダーライドブックの代わりにして全知全能の書を復活させようとしていた。だがソードオブロゴスの中にも全知全能の書を復活させ、その力を手に入れ神になろうとした者が居た。そいつは………」

天馬

「ソードオブロゴスの最高責任者、《マスターロゴス》だね？あの不思議な本に書いて………あ。」

レックス

「どうした？」

天馬

「もしかしてクリスって、あの本を守るためのブレイドだったのかも。」

ホムラ

「本を守るブレイド？どう言うことですか？」

天馬

「今思い出したんだけど、あの本には表紙に青いクリスタルが埋め込んであったんだ。それに本を開いて初めてクリスに会った時、クリスは自分の事を『この本に宿りしブレイド』って言ってた。あの表紙のクリスタルがクリスのコアクリスタルだったとしたら、クリスは本を封印するためのブレイドだったんじゃないかな？」

ビヤッコ

「資格の無い者が触れると副作用が発生する、コアクリスタルの特性を利用した封印術と言う事でしょうか？確かにそれなら、クリス様が聖剣やワンダーライドブックに詳しい事にも納得出来ますね。」

ニア

「じゃあ天馬が見つけた不思議な本が、その全知全能の書って事だったりしない？」

クリス

「いや、それは無いだろう。全知全能の書は一度、マスターログスが不完全な状態で復活させた。だが剣士達との戦いによって破壊され、マスターログスも神の力を失いメギドに殺された。そしてメギドの長、物語を司る魔物《ストリウス》が全知全能の書を完全態に限り無く近い状態まで復元し、マスターログスを超える神の力を入れた。しかしそれも剣士達との戦いで完全に破壊された。天馬が見つけた本は、過去の剣士達の記録と共に、残されたワンダーライドブックを封印していただけに過ぎない。」

ニア

「じゃあさ、仮に今ココで全知全能の書を復活させる事って出来る？ 聖剣は私達、本はクリスが全部持つてる訳だし。」

クリス

「無理だ。復活させようモノなら、既に天馬が俺を解放した時点で復活している。単に聖剣と本を集めるだけでは復活できないのか、それとも既に全知全能の書が何処かに存在するのか、それ以上は俺にも分からない。」

ビヤツコ

「悪用を防ぐために、明確な情報は残さなかったのかも知れませんか。」

トラ

「でも不思議だも……その全知全能の書って本、いったい誰が作ったんだも？」

クリス

「それも不明だ。だが、手にすれば神にもなれる森羅万象を司る本だ。それを作れる存在となると、もはや神様としか言いようが無い。」

レックス

「神様か……」

クリスの話は終わり、一行はその後ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンに見張りを任せ眠りについた。そして翌朝、クリスは天馬とレックス達にスマートフォン型のとあるアイテムを渡した。

天馬

「何これ？」

クリス

「《ガトライクフォン》。簡単に言うなら高性能な小型通信機だ。これがあれば例え異世界に居ても連絡が取り合える。さらに……」

クリスはガトライクフォンに表示されたアプリをタッチし、画面をたたみ放り投げる。

ガチャ！ガチャ！

『ライドガトライカー！』

するとガトライクフォンが巨大化し、フロントに機銃とビーム砲を搭載したトライク型のマシンに変形した。

レックス・天馬・トラ

「でええええ!!」

ハナ

「大きくなって、変形しましたも!?!」

クリス

「かつての剣士達が使っていた共通マシン、《ライドガトライカー》だ。今後の冒険の助けになってくれる筈だ。」

ニア

「て言うか、こんな乗り物があるなら最初っから出してよ……」

ホムラ

「まあまあ……」

クリス

「とにかくだ。ここからインヴェディアの街までどれくらいあるか分からないから、コレで行ける所まで行こう。」



レックス

「そうだね。んじや早速！」

レックスはクリスを真似て、ガトライクフオンをライドガトライカーに変形。そしてライドガトライカーに乗り込みハンドルを握る。すると、ホムラもレックスの後ろに乗り込んだ。

レックス

「ホムラ？」

ホムラ

「せつかくですから、後ろに乗せて下さい。」

『オーシャンヒストリー！』

と、今度は何故かビヤッコがデュランダルに変身しライドガトライカーに乗り込んだ。

デュランダル（ビヤッコ）

「お嬢様、どうぞ私の後ろに。」

ニア

「お、気が利くじゃんビヤッコ！」

ニアはデュランダルの後ろに乗り込み、デュランダルを抱きしめる。

ハナ

「ご主人の身体ではハンドルが持てませんも。ここはハナが運転しますも。」

トラ

「もも、一言二言余計だも……………」

ハナもライドガトライカーに乗り込み、その後ろにトラが乗り込む。

クリス

「準備は良いか？」

天馬

「いつでもオツケーだよ。」

天馬とクリスも各々単独で乗り込み、一行は街を指して出発した。

—————

くインヴェディア内部 ジェノバス大空洞く

しばらく走ると、一行はぼんやりとだが明るい巨大な空洞に辿り着いた。

ニア

「こっちは、ぼんやりとだけど明るいね？」

セイリュウ

「インヴェディアの巨神獣は背中の体表が半透明じゃからな。じゃから外の光が、此処まで届いておるんじゃない？」

レックス

「つて事は、今巨神獣は雲海の上って事か。」

ホムラ

「光が来る方へ辿って行けば、此処から出られるかも知れませんね。」

「待ちな!!」

キキキキキーツ!!

突然、空洞内に男の声が響いた。レックス達は慌てて急ブレーキをかけて止まり、辺りを見る。すると前方の岩のアーチの上に数人の人影が見えた。人影は岩のアーチから飛び下り、レックス達の前に着地。緑色の鎧を身に纏った褐色肌の大柄な男と、その男のブレイドとおぼしき鳥人間の姿をしたブレイド、そして数人の兵士とおぼしき男達と数人のブレイドが姿を見せた。天馬達はライドガトライカーを下り、男達と対峙する。

大柄な男

「この辺りじゃ見ない顔だな……………さしずめ、漂流してる最中に飲み込まれたってところか?……………ん?」

大柄な男はホムラに気づき、目を向けた。

大柄な男

「翠玉色のコアクリスタル……なるほど、噂は本当だったか！」

レックス

「噂？何の事だ？」

大柄な男

「ドライバーなら誰しも、一度は耳にする伝説のブレイド、天の聖杯。それが500年ぶりに目覚めたって噂の事さ。だがその天の聖杯のドライバーが、まさかお前みたいな小僧っ子とはな……小僧、天の聖杯と剣を渡しな。ソイツはお前には過ぎた代物だ。」

レックス

「まさかお前もホムラを!？」

天馬

「誰がホムラを渡すもんか!みんな!」

『聖剣ソードライバー!』

天馬達は各々聖剣を装備し、ワンダーライドブックを手に取る。

大柄な男

「ん？」

『月神・烈火・流水・黄雷抜刀！』

天馬・レックス・ニア・トラ

「変身!!」

『狼煙開戦！』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！銃剣撃弾！』

『闇黒剣月闇！』

ホムラ・ハナ・クリス

「変身!!」

『シャイニングペガサス!』

『ブレイブドラゴン!』

『ライオン戦記!』

『ランプドアランジーナ!』

『昆虫CHU大百科!』

『音銃剣錫音!』

『ジャアクトドラゴン!』

そして一斉に仮面ライダーに変身した。

大柄な男

「なっ!?変身しただと!？」

男達は天馬達の変身に驚いた。すると……………

「ヴァンダムさん、ちよつと待って!」

突然、一同の前に一人の少年が現れた。

グラディウス（天馬）

「っ!？」

だが今度は、グラディウスがその少年の姿を見て驚いた。そして思わず、グラディウスは少年の名を口にした。

グラディウス（天馬）

「信助!？」